

# 文樂座 人形浄瑠璃

九月興行



文樂座

四つ橋

一部  
金拾五銭

新秋を飾る

### 九月の文楽人形淨瑠璃

爽涼の秋を迎へてみなさまの御健康の益々お熾なごをお欣び申上げます。  
 茲に文楽座九月興行は花形精鏡の集團に巨頭を据へ狂言また久方振りで上演を見る名曲にさては極め附の秘曲に粹をつくり新秋劇壇に堂々の盛陣振りを見せるもの、更に紋下津太夫の合三味線として十六年振りで舞臺に返り咲いた鶴澤綱造の入座披露あり、絢彩いよ／＼艶やかに御座あます。其他皆様をお迎へする設備も充實して居りますれば何卒お揃ひで御來場の際おねがひ申上ます。

昭和六年九月一日

四ッ橋

## 文楽座

昭和六年九月一日初日

毎夕四時開幕

二日目よりの

・御観覧料・

- 一等椅子席 御一名—金二圓五十銭
- 二等席 御一名—金一圓三十銭
- 三等席 御一名—金七 十 銭
- 一等お座席 御一名—金三 圓

一等お座席 一等椅子席 は五日前より

### 前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七二一番  
 専用電話 七四〇八番  
 電話南 三七八八番

お草履の準備は御座ありますが、靴、草履はそのまゝ御入場出来ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌カヘツト廣告御載掲希望の向は文楽座編輯部へ希す

あらゆる印刷

## 永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目  
 長三〇八番  
 四九四番  
 四九四番  
 一四九番  
 } (44) 土佐堀

交樂海 大味自前津大夫

希平留心 大津酒造

大津酒造 出味酒造 約考九

大津酒造 出味酒造 約考九

出味酒造 約考九

出味酒造 約考九

出味酒造 約考九

出味酒造 約考九

出味酒造 約考九

出味酒造 約考九

出味酒造 約考九

出味酒造 約考九

出味酒造 約考九

出味酒造 約考九

出味酒造 約考九

出味酒造 約考九

出味酒造 約考九

出味酒造 約考九

三味線

三味線 出味酒造 約考九

三味線 出味酒造 約考九

三味線 出味酒造 約考九

三味線 出味酒造 約考九

# 文樂座人形浄瑠璃

九・月・興・行

豫定時間表



前 ひらがな成衰記

大津宿屋より  
逆櫓の段まで

大津宿屋の段

(四時より四時二十分まで)

笹引の段

(四時二十分より四時三十分まで)

逆櫓の段

(四時三十分より六時三十分まで)

幕間 二十分間

中 蝶花形名歌嶋臺

小阪部館の段

(六時五十分より八時十五分まで)

幕間 十五分間

次 三十三所壺坂寺

澤市内の段

(八時三十分より九時三十分まで)

幕間 十分間

切 鷗山古跡松

中將姫雪貴の段

(九時十五分より十時四十分まで)

(舞臺裝置 松 田 種 次)





人形芝居について

◇人形芝居發達の事

◇又樂座なり立の事

◇人形頭説明の事

今から見れば簡單なものに相違なかつたけれども、後世人形と呼ぶ種類の物は、日本でも遠い昔からあつたのであります。其れば傀儡子に

始まつたもので、傀儡子の名は已に十餘年前に『和名抄』や『新猿樂記』『雲州往來』に見えて居り、傀儡子の輪廓は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧の民で、男は狩を表業に、木偶や土偶を舞はせたと御座います。其當時に、四三と云ふの木偶を舞はせた事か『散木奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚な物には相違なかつたので、多少の糸が附いて居たかも知れない、と云ふ想像は出来ない事もありませぬ。其後傀儡子は、門附か辻立で命脈を維いで居たらしい御座いますか、淨土宗の起るに至つ

て、傀儡子の大方は淨土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたもので、所謂首掛け芝居の形式ではあつたが、佛菩薩の本縁や、寺社の縁起、即ち謂ふ所の本地物を語る説經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる様になりました。之れが人形舞はしの擡頭する遠因だつたと思はれます。而して、其内には例の三味線が渡來して來るし又お粗末ながら淨瑠璃といふものも出來た、即ち京都の目貫屋と云へるが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲に始めて三味線に上した淨瑠璃、又それに合せて舞す人形と此三者が綜合される事に成りました

たのが、慶長年中、即ち徳川の始  
頃ですが、忽ちにして京では四條五  
條の如き或は江戸の堺町さか茸屋  
町さか、橋が立つて此人形芝居が繁  
昌したのであります。順序として當  
然此頃には最う人形の類も増しては  
ゐたのですが、然し舞臺などは固よ  
り無く其人形さて首があるばかり、  
遣ひ手の手が人形の着物の裾から袖  
口へ出されて舞されたもので、大阪  
の石井飛彈掾も始めて其手足の工夫も  
したものです。由來此掾號なる  
ものは人形師の所有なりしを後に淨  
瑠璃太夫の勢強くこれを専らにす  
るに至つたこの事。さて竹田のから  
くり人形も出來たり、野呂松のの

る、人形が出來たり、次郎三郎が  
おやま、人形を使つたり、殊には彼  
の元祿時代になるまで大阪へ義太夫が  
現はれて竹本座をばじめ、又近松翁  
が現はれて此義太夫節のために人形  
芝居に最も適切な名淨瑠璃を澤山書  
き卸し、しかも其人形遣ひとして  
辰松八郎兵衛さ云ふ名人が出て、  
今の出遣ひの如きも此人によつて始  
まつたさ云ふのが、始めば此人形を  
下の幕さ上の顔隠し幕の間から出し  
て遣つてゐたので、畢竟人形の動  
くに随つて自然遣ひ手の身体も動く  
之が見好くないから黒幕の蔭に黒頭  
巾して遣つてゐたものを、愈々今度  
八郎兵衛が袴を着け手摺を離れ無

量の手妻を遣ふに其全身少しも亂る  
ゝ事がないといふ評判を取つたので  
あります。加之他方また豊竹座の出  
來るあり、即ち西と東と同じ大阪の  
地に於て大夫三味線、作者から人形  
遣ひさ全く競争的に繁昌を來した  
のですから、従つて其進歩發達は眼  
覺しいものがあり、道具建から人形  
衣裳總ては美々しく立派やかを盡  
し、舞臺大幕の上に小幕を引くやら  
山簾を本山の張ぬきにするやら、  
太夫も出語りをするやら、例へば人  
形にしてから先づ眼も動き、指先  
が動き、享保の末には竹本座「大内  
鑑」の典勘平彌勘平が腹をふくらま  
し、元文になるまで豊竹座「武烈天皇

儀』の佐手彦の眉を動かさしはじめるなど、非常に發達を遂たのであります。即ち言を換れば當時名人の遣ひ手も輩出した次第で、中にも吉田文三郎の如きは享保始め竹本座の『國性爺後日合戦』に初出勤、錦舎の出遣ひに片手の晴業を示して以來、いふものは實に此人形については工夫を凝らしたもので、其一例を擧ぐればある『舞祭』の人形に始めて帷子衣裳を着せるさか、或は其遣つた一寸女房おたつに桔梗の帷子、黒繻子の前帶淺黄の綿帽子を着せさせた如き、今なほ歌舞伎で眞似てる所事實此時代さいふものは操盛人を極めて歌舞伎はあれど無いも同然、幟は林立

して其眞負は凄まじい有様であつたご云ひます。江戸まで矢張りご同じく、慶長の昔薩摩淨雲が淡路の人形舞しと此人形芝居を始め、各派の淨瑠璃芝居も誠に繁昌してゐたのです。享保に一端大阪の義太夫芝居も入つて來てからご云ふものは又漸次に其勢力範圍ご成つてしまひ御案内の同様に歌舞伎狂言などは全く此人形の眞似のみ演てゐたものであります。前云ふ辰松も三郎兵衛も共に江戸へ來て其妙技を揮つた事があるのです。死も角も此人形芝居の全盛は凡そ百年間、寶曆から明和以後になるご漸次本場大阪でも亦江戸の方でも其勢力は歌舞伎に奪はれ、

結局あの大坂の新興北堀江座すらも大した事には成らなかつたご見るべきであります。然し此間に在つても人形は其一個に所謂黒坊四五人も掛かり、或は出遣ひ二人も掛かる事、其他太夫の引拔早替などのケレン早業は愈々進歩を見せたので、而も操芝居としては前述の如く、其後は盛んならぬ各座の起伏消長も今日に至れりご云ふ次第で、それも今や獨り當大阪の文樂座が現存するのみで他には語るべきご無いのであります。さて當文樂座は百餘年の昔淡路の人植村文樂軒が大阪高津區に櫓を起したのに始まり、一時中絶しましたのを十七年終に東區淡路町五丁目

御靈神社境内へ移つたのであります。以來發展を來たしてゐましたが、大正十五年晩秋不慮の災禍に喪失しました。機を得て昨昭和五年一月四ッ橋に新築開場した次第であります。而も日本にこれ一座きり云ふのは心細い次第で、彼の能樂と同様日本の古典的舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務があらうか考へます。次第で御座います。序でながら此人形は大體、首胴、手及び足の四部に分ける事が出来、而も其首あるひは頭につきましては勿論大まかではあるが、大體の役々が定まつて居ります。例へばげんびし(檢非違使)と云ふのは、竹本座

の「用明天皇職人鑑」の時檢非違使の役に使つたから此名が出たので、其後は廣く世話時代共に用ひられて、例へば「守子屋」の源藏、「妻八」の八郎兵衛、或は「千本櫻」の銀平、「陣屋」の盛綱のこきき、なほ之の眼り目なるはあの盲兵助などに使ひます。今では實盛なども之です。然し南水漫遊などを見るに別になつて居るやうであります。それから矢張南水漫遊には素齋鳴さあります。今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良の助などにも使ふ事がある云ひます。兎もあれ昔相巫や「薄雪」の兵衛、あるひは「紙治」の孫右衛門などを勤める首で矢張竹本座へ近松が書いた「日本振

袖始」から出た人形だぞ申します。それから若男といふのは源太も呼んでゐるが聞きます。持役として「朝顔日記」の駒澤に「太十」の重次郎、その眼隅へ張を入れ其眉を引きつめる「阿古屋」の重忠に成つたりし他種類の若男は敦盛の役などをすると云ひます。又所謂おやまの中にはおむすこ云つて之は勿論娘の事で「野崎」のお染「壺坂」のお里「妹脊山」のお三輪などを勤めるのもあります。南水漫遊に傾城もあるのも多分この同じものか考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目が擧げられて居るのであります。





大津宿屋の段

前  
ひらかな盛衰記

大津宿屋の段  
笹引の段  
逆櫓の段

- お 筆 竹本町太夫  
船頭權四郎 竹本貴風太夫  
女房およし 豊竹富太夫  
山吹御前 竹本長子太夫  
番場忠太 竹本陸路太夫  
駒若丸 竹本龜久太夫  
竹本さの太夫  
竹本文字榮太夫  
竹本佐久太夫  
竹本相露太夫  
棗植松 竹本相露太夫

ツレ 鶴澤芳之助  
ツレ 鶴澤友二  
ツレ 鶴澤友造  
ツレ 鶴澤叶太郎

この淨瑠璃は元文四年竹本座で初演された文耕堂、三好松落、淺田可啓、竹田小出雲、千前軒等の合作で『源平盛衰記』を軟かく脚色したもので全五段もの。三段目の切『逆櫓』の段最も有名で、逆櫓として今日道したのには初演の竹本播磨少掾の功績に負ふところ大なるものがある。内容を申上げますと、

に父鎌田隼人に護られ落人となつて諸國を流浪し、大津の宿屋で梶原平三の家來番場の忠太といふ追手の者に襲はれたが同宿の巡禮權四郎の孫植松が間違つて駒若の身替に捕はれて危く虎口を逃れた。

權四郎は播州福島島の船頭で婿の松右衛門は義仲四天王の一人樋口次郎兼光で、栗津の敗戦から姿を晦し、逆櫓を覺へ義經を亡げす企てから權四郎の婿となつてゐるものである。その陰謀も梶原に見現はされて捕手がかゝつたが島山重忠の情で駒若は助けられ樋口次郎は繩にかゝるさいふ壯重味溢れた中に情緒纏綿たる時代世話物であります。

(床本) 大津宿屋の段  
あづまじをのぼり下りの旅人も二つ

人形

山吹御前 桐竹紋太郎

駒若丸 吉田文枝

お筆 桐竹紋十郎

船頭權四郎 吉田玉幸

女房およし 吉田扇太郎

悴植松 吉田榮之助

番場忠太 吉田市松

と三つに追分や大津にならぶはたご  
 やの棟門多き其中に名高き關の清水  
 屋むさくより奥に客さめて料理拵へ  
 粗板の音もてきく亭主が氣くばり  
 下女も男もそれ／＼に茶はこぶ風呂  
 焚人さめる門賑はしき黄昏時あらた  
 うま道引賜へ觀世音はこぶ歩みの順  
 禮姿春に國名を負擧の年は六十に色  
 黒き達者作の老人も娘と孫を打連て  
 胸にかけたるふだらくや、紵の路大  
 和路打過てけふも暮ぬる鐘の聲、三  
 井寺に札納め爰かそこかま指覗けば  
 亭主がかけ出てコレ親父様お泊りな  
 ら脇平見まい名代の清水屋座敷むき  
 れいな木賃が安いサアおはありさ引  
 さむればア、コレ／＼めつたにひつ  
 ばつて着物やぶつて貰ふまい、何ぼ  
 泊たかりやつても木賃を聞にやぼか

／＼と這入らぬ親父サアいくらじや  
 きり／＼言ふたハテ定りは三十なれ  
 どよいやうにしてさめましよういイ  
 ヤよい様さばよい衆の事、おらはす  
 んさびんば西國道々も構ふつて順  
 禮に御奉謝で貰ひだめの米もあれど  
 たつた今後の石塲でそばをした／＼か  
 してやつたりや腹袋に足も入てあす  
 迄煮焚も何にも入ぬがナント甘宛で  
 さめぬかい、ハアそりや安けれど順  
 禮衆の事じやもの儘よまけましょ、  
 イヤ安うはないぞや錢の高いが合點  
 か、しかけてつかへば五分四五りん  
 利も有すぎよサアそんならおよし草  
 鞋さげ、サアほん上るヤアはい／＼  
 と襖隔て次の間に打寛いで扱歩いた  
 は、けふは大道そちもくたびれおり  
 や猶の事道へたて氣ばかりいらくら

船頭と鬘は陸では埒の明ぬものヤ  
レしんぞや腰いたや、ドレ其枕取て  
たもア、ヤイ／＼コリヤ槌松よ、其  
襖明んものじやこはいぞ／＼コリヤ  
爰へこいじやかんでやる、エ、汚な  
い鼻たれでは有ぞチ、ヤレ／＼又飯  
ごり引出すはいさりさは只手のない  
やつやほんにそれで思ひ出した、コ  
レ／＼宿の衆ぞれぞちよつと頼んま  
しよ早ふ／＼チ、コレこつ様、けた  
くましい何ぞいのイヤ此飯ごりがさ  
／＼と洗うて貰てあすの出立の残り  
をつめる、菜は茄子に大根を取交ぜ  
香のもの、こけら鮓頼んで置と語は  
ぬたつみあがりのさんきよ聲それこ  
いはれど紛れなき船乗そこそしられ  
たり、同じ浮世に憂思ひ人忍ぶ身は  
おのづから茅にも心奥座敷山吹御前

は先達て爰に宿りを假初もならはぬ  
旅につかれ果御心地例ならればお傍  
離れぬ鎌田の準人娘のお筆諸共にい  
たばり介抱する中に何の頑是も泣出  
す駒若君のやんちや聲、襖一重に聞  
も氣の毒コレおよし、あちらの旅人  
も子有そふなむ、さつてもせむむ  
はわやく言なアだましてもすかして  
もおこりおるぞ何所にも迷惑ハア、  
何ぞやりたいものじやがチ、それよ  
童べすかしはこんな時今あこで買た  
大津繪一枚やるそ取出すを槌松が擱  
んで放さばこそ、いやじや／＼と泣  
わめく、チ、ヤイ／＼／＼コリヤ  
／＼やぶるな、やい／＼エ、しはい  
坊主めコリヤよふ合點せい、此繪は  
座頭の坊が種を犬がくはへて引所  
こりや目がなふて面白ない、よその

子にやつてのけ、我にやこれ／＼衣  
きた鬼の念佛がみくだく撞木を持って  
た、きかぬぐばん／＼／＼イヤぐば  
／＼ぐばん／＼と紛らす中におよし  
が襖押明てコレ申お隣のおちいさい  
のがきつい泣やう是進ぜましよご指  
だ出せばお筆が取て押戴きコレハ／＼  
忝いお前にも子達有によいもの  
進せて下さんしたコレ／＼あつかホ  
いよいのじや、アレよそのや、御ら  
うじませおさなしい事はいの、チ、  
アノおつしやる事はよふおさなしか  
ろぞ其わんげくさ意地悪でごふもこ  
うもなる事ちやござりませぬ、お前  
のは色白に美しいよいお子やのおい  
くつでござりますサア此お子は三つ  
なれど年よはでござんすはい、扱も  
いや／＼そんなりや是とぞおない年同

じ三つと言ながら此坊主は二月生れ  
で年づよホンニそれで大むらにも  
有たくましい子でお仕合せ見れば順  
禮さしやんすそふなが奇特な事や、  
所はごんぞい、アイ所は是から大方  
十二三里も下コリヤおよし主の臍さ  
ぐるやうにエーぐづぐしたものでい  
ひやうたつた一口つい津の國の船頭  
じやと言たおよいはいア、せはしな  
い、ちつご人にもものいはせたがよ  
いはいのマア聞て下さりませ此様に  
乳呑子をかくへ長旅を致しまするも  
私お稚なじみ此子が爺は随分達者な  
人で有たがフト風の心地と病付たが  
定業やら間もなふ死なれて、今年が  
恰度三年に當りますれど何を供養施  
しも内證のかひば廻らす西國は結構  
な事じやと聞ばせめて足手を引てな

りさ夫の菩提を弔たきに思ひ立て  
の肝禮と語るを聞て山吹御前の子  
も三つ我子も三つ爺親に別れたさは  
果報拙なやいさしやなふ自らさても  
殿御に離れ便なき身の旅の空、世に  
は似た事もあるものご身につまさる  
御涙アレ聞たかおよしあなたも御  
亭様がないさいやい、そりや悲しい  
は尤じやが、生身は死身、合せも  
のは放れもの何ぼ泣いても返らぬ事、  
さつぱり諦めて早ふ男を持しやりま  
せハテそふなけりや我々人も肝心の  
商賣がなりませぬそれでこつちも近  
頃幸ひな者等に取たが、此およしが  
柁の取やうむよいゆへか、何時共な  
ふ帆柱立て、乗まする、押まする、  
船一まきならござれくそでおり  
は一たすかり大船に乗た心、外に望

みは何にもないがたつた一色、サア  
何國の浦でもないものは金と化物、  
あるものは質の札と借錢こいつも招  
織でござります、見りやお前方はよ  
い衆そふなむご元からごつちへご  
ざるご、問ばれてお筆が取つくるひ  
サア我々は都を放れ片山里から信濃  
路へ心ざしエー聞へた善光寺詣りじ  
やなチーいかにもそれくそれにっ  
けて難儀な事は、是にござるお主様  
が俄の御病氣アお道理でも有終に是  
まで道一里さおひろひなされた事な  
ければおつかれの出るも尤、わしら  
が足さへ草鞋にくはれて、ホー豆が  
出来たでござりましょ、そりや針で  
突しやりませ、惣体豆と言ふものは  
突さじくく汁も出まするア、コレ  
さつ様ひよかすかさ出ほうだいな何

ぞいの、イヤひよかすかじやない、よふなる事を言て進ぜるアレま、いのチ、笑止な人やミ袖おほへばイヤ、ちつ共苦しふない、最前から手前もいで、挨拶するも合點なれど却て興もさめふかご態ご控へて居申た今娘も言ふ如く御主人の御病氣親子の者が御介抱も旅宿なれば萬事心に任せず何かなお慰みと思へ共口おもたき我々では埒あかね正眞の旅は道連れ、かふ打寄も他生の縁サア、遠慮なしに何なりさもお氣の晴る咄を頼むア、旦那殿コリヤ迷惑おらは咄しは何にも知ぬにチ、有ぞ、つた一つ咄しましよ、昔々ぢいば山へ柴刈りにば、川へ洗濯しに、ア、コレ、そりやあんまり子供も知た昔咄、古い、古い、古いによつて

洗濯しまする、洗ふても磨いても新しふならぬものは青年ご此顔の眞黒なはしつかい斗、もふれたむよござりましよ、蒲團てん手に寝轉びて咄し牛へ亭主によつこりハア、こりや皆まだお休みなされぬか、さらば行燈をさりましよかい、此儘置は油代が十文出まする、チ、そりや合點じや、やつぱり置たり、爰で一つ談合が有兩方かれた此行燈、そつちもこつちも勘定づくナント三文まけてもらなかいへッ扱もこまかい虱の皮イヤおら、虱よりこの蒲團はどふやらうち、千手觀音はおらぬかや、ハテ勿体ない、服禮も觀音嫌ふてよ、いものか、信有や徳有奇特には道中けのない様に乗移つてござりましよ、ミ笑ふて勝手へ入にけり、後ば

互に旅草臥子供の添乳肘枕咄しのあさも轉寢にさろ、寢入折こそあれ村中をかけ廻る歩行によつこり門口から御亭主内にかヲツト何じやイヤ何じやば、お尋者殿ふ御詮議委しい事は來て聞しやれサ、今じやちやつさ、ホ、そりやいかさなるまい、遅くば庄屋のたくら者、又頭から嚙じや有さ氣もわくせきだかたくに羽織引かけ出て行く、既に其夜も更渡る遠寺の鐘も幽なる灯火細くかけさして四方に人音しづまりぬ旅をさもしらぬ稚子、隣同士宵寢まごいの目を、ぼつちり、ちぶさ放れてそろくさはい出て一人にた、笑ひつむりてん、てうち、あば、あいの襖をへ行ばこなたの子も出て這廻り、諾合ふて寄こぞりおせ、

笹引の段

竹本相生太夫  
鶴澤友之助  
鶴澤清二郎

人形

鎌田隼人 吉田光之助  
山吹御前 桐竹紋太郎  
お筆 桐竹紋十郎  
番場忠太 吉田市松

こぼうしがおない同士互に愛する如  
くにて、機嫌笑顔の沙の目細目、き  
せるぐはた／＼手づさひや菅笠取て  
着たは松茸ほしが顔でつかめばや  
らじと引げり合、餘念たはいもなか  
りしむ、悦ぶ先にほつとあくびも子  
供の常、又行燈に手をかけてこなた  
か引ばあなたも引突戻せば押かへし  
引合拵子に土器ゆり込灯火ばつたり  
真くらやみ我と我手に驚きて、わつ  
と泣出す子供の声、寢耳に悔り目覺  
す人々こりや何事さうる付中亭主が  
注進先に立ち梶原が家來番場忠太大  
勢引連れかけ來りソレ遁すなご下知  
すれば捕た／＼と亂れ入音に驚く家  
内の騒動ふるひわなきあつたふた  
危ふさこばさくら紛れ行當るやら  
こけるやら上を下へさ。

床本 笹引の段

立さはぐ風もほげしき夜半の空、星  
さへ雲に覆はれて、道もあやなく物  
妻き裏は田畑を隔ての大藪、押分か  
き分忠義一途にかい／＼しくお筆は  
片手に若君抱き山吹御前の御手を引  
かけ出て息を繼、扱もひあいや危い  
事、さく様は多勢を防いで後から追  
付く、早ふにげよさ有し故、めつた  
むしやうに走つても暗さは闇し、勝  
手はしらず、ごつちへ逃てよからふ  
さ、うろつく向ふへ數多の人聲、又  
むら／＼と馳來り遁さぬやらぬさ無  
二無三打てか、れば叶はじや山吹御  
前に若君渡し一腰抜いてはつし／＼  
ひるます去らず戦かへばさしもの大  
勢たまりかれ逃るをやらじと追て行

く後にはあゝ山吹御前長追仕やんな戻つてたも此隼人はごふしやつたア、氣づかいや、あぶなやさあせる向ふへ打合切合、切結び追つまくつかけ来る番場を相手に鎌田の隼人忠義にさへたる切先又先受つなかしつ上段下段秘術をつくし戦ひし忠太がいらつて打つ刀受はづして弓手の肩先袈裟にすつばと切下られ、心は鬼神さばやれ共腕も弱り目もくらみ足を立兼たぢくく、よろしく

を絶つて葉をからすは、ア、是非もなや此子一人助けたまでで仇にも害にもなるまじ生ごし生るものごに物の哀れはしるものぞ、取はけ武士は情を知る、自はさもかくも此子が命を助たけ慈悲じや後生じや涙ご俱にわび賜ふ、ヤアあまちこい成ぬく當歳子でも男のき生置ては後日の仇、くり言言はずさア渡せと飛かゝつてひつ取ばわつと泣子を放さじご取付賜ふをもぎ放し突飛せば又絶りつき加退れば武者振付、やらぬく泣賜ふ、ヤア面倒な女めめ肩先抓んで投付ればうんごばかりに息絶々、其隙に若君を宙に引提首はつしと打落し、小脇にかい込飛む如くに馳り行く、山吹御前は夢心地むつと起てハア悲しや西も東も

辨へぬ此子に科はなきものをむこやつらや胸慾や、返せ戻せの聲もばるかにお筆が聞付息を切つて立歸りはつと驚き抱かへコレお心は慥なかつ若君様はごにござる、様子はおつしやれくサ、ごふじやぐごせき切て問ば答へも苦しげにチ、お筆かエ、遅かつたくくはいの、情なやたつた今追手の者が爰へ来て隼人も討れ駒若も殺された、ソレ首切つて逃たわいのエ、さ仰天狂氣の如くあきれて詞も出ばこそ、胸も張裂悲しさの涙はらく立たり居たり身をもき齒をかみしめエ、口惜しや今一足早くばなあ、女でこそあれやみくご討しはせまいにシテく其切た奴はごつちへ逃た顔見知つてござりますかエ、此くらさではそれも

朝敵謀反の義仲も世悴、敵の末は根

ぬチ、様子はそつちに覺え有はづ、

さりますかエ、此くらさではそれも

しれまい申々、名はお聞なされぬか  
イヤ／＼顔も名も知られど梶原も仕  
業で有ふ可愛やわつとたつた一聲泣  
たか此世の暇乞父御さいひ若そ言ひ  
及にかゝり果敢なき最期、刺へ是ま  
で付添忠義を盡す隼人まで爰で死  
の約束か、こはそもいかなる先生の  
報ひか罪か淺ましやぞ御身も絶る叫  
び泣お筆も有にあられぬ思ひ、父の  
最期はお主へ忠義、悔む心はなけれ  
共おいこしや駒若様、けふの今爰  
らしみ私を廻し片時放さず抱かれて  
泣つ笑ふつたいけなお顔をやつげ  
り見るやうなぞ、くごき立／＼聲も  
惜ず歎きし涙の内に心付せめて一  
目若君のお死骸なり共見んものさあ  
たり見廻し尋る心も空も聞あやしや  
血にそむ稚きからだ、手にさばるを

かき抱き涙さ俱に撫廻しハア、此着  
物はごぶやら手ざわりも違ふ、そし  
て何やらびら／＼とこんな物は召ぬ  
筈、合點が行かぬとよく／＼すかし  
見、ヤア是は違ふた申／＼こりや若  
君ではござんせぬ／＼ぞヘヤア何さ  
いやる駒若でないさはハテ此死骸は  
笈摺かけて居るはいなヤアぞれ／＼  
ほんにかげつた、こりやごぶじや、  
これは／＼と二度胸リム、扱は今の  
騒動に相宿の子と駒若と取違へたか  
ハテ悲しやア、コレ／＼そりや何お  
つしやる悲しい事はござんせぬコレ  
取違へたのでな若君のお命に氣づか  
ひない、是則天の惠御運の強さハ  
ア／＼ハ、ハ、ハ、嬉しや／＼有難や  
コレお悦びなされませ申々、是はし  
たり、なぜものをおつしやらぬ、ハ

ア又目まいがきたそふな、これは  
／＼エ、お氣の弱いふがいない事  
は有ぞコレ／＼申と言共弱る身の上  
に悲しきつらさ氣をもみ上げ又嬉し  
さにかつくりと引取息もあへなき最  
期お筆はあけてうる／＼きよろ／＼  
コリヤ何とせふ、ごぶせふと脈取て  
見つ、耳に口コレ／＼申山吹様山吹  
様／＼いのふと、言聲さへ人を憚り  
思ひ切て呼れぬかエ、情ないエ、ご  
んなさ心は千々に砕く共はや色變り  
手足は氷と冷切て押動せど其かいも  
涙先立魂も共に消へ入る憂思ひ大  
地にかつばさ伏轉び聲の限りを泣つ  
くす、理りそこそ聞へけれ、や、あ  
つて顔をあげハア、そふじや／＼返  
らぬ事悔まじ歎くまじ一まづ此場を  
立退て、妹千鳥と心を合せお主の仇



逆櫓の段

中 竹本鏡太夫  
 鶴澤友平  
 切 竹本大隅太夫  
 鶴澤道八

人形

船頭松右衛門 吉田榮三  
 實ハ樋口次郎兼光 吉田榮三  
 船頭權四郎 吉田玉幸  
 女尻およし 吉田扇太郎  
 お 筆 桐竹紋十郎  
 駒若丸 吉田文枝  
 船頭又六 吉田覺三郎  
 船頭富藏 吉田市松  
 船頭九郎作 吉田傳之助  
 島山重忠 吉田玉次郎  
 軍兵 大ぜい

父の敵、逆隠るゝ共天地の間命限り  
 根限り、やはか助けて置べきかご、  
 馳け出しがイヤ〜〜それより大  
 事の〜若君片時も早く取かへさふ  
 ア〜いや待暫し死影を此儘捨置れず  
 無縁の此子、父の影諸共に隠さんご  
 は思へ共、前後に満たる多勢の追手  
 隙取ば却て妨げ、せめてお主の面影  
 を先々かしこへ葬らんさあたり茂  
 る竹切てかき上乗る笹の葉は亡き魂  
 おくる輿車、轆も細き千尋の竹肩に  
 打かけ引足もしごろもごろに定めな  
 き淵瀬と替る世の憂を身一つにふる  
 涙の雨のおやみもやらで道のべの草  
 葉もひたす袖袂なく〜たどり。

(床本) 逆櫓の段 (中)

行く空の難波渦あし火焚家の片庇

家居には似ぬ里の名や福島の地はお  
 しなべて世を海渡る船長の有む中に  
 も權四郎さて年も六つを十かへりの  
 松右衛門といふ通り名は養ひ筆に譲  
 りやる門に目當の松一木所に憂る親  
 仁有、志す日に邊近所のさゝ婢達お  
 茶まゐれさて招かれてナフ權四郎様  
 けふは志の日じやお茶呑さおよし  
 様の直にお使から共ない、悉い誘ひ  
 合せて参つたご、ごや〜内に入れ  
 れば、チ〜よふこそ〜けふは娘か  
 前の連合此趙松めが本のさゝが三年  
 の祥月命日に當つた故、滯い茶を焚  
 ました、呑でゆつくり仕て下され、  
 常なら箸でも取せませす筈なれど、知  
 ての通り足弱な娘や孫を引連て腹禮  
 の長道中、物入の後何にもしませぬ  
 さは言へ娘何ぞないか何ぞぞ申たら

人手はなし此子はせむ、ほんの心ばかりをばあむつて御回向頼みますと霞交りの煎豆に燭香持せて汲出せばム、もふ三年になりますか、ア、月日に關守すへざればじやの、今の松右衛門殿はござつて間もなくしみる、さ付合れば心入は知ぬが、死しやつた此槌松の親御は恰度此人參の太煎の様に毒にならぬ人で有たにア、いさしやく南無阿彌陀佛皆回向してお茶参りませ、海鹿のおあへ此たんば、扱も味し舌、茶受に咄し嚙交せて仇口くのかまましき皆船頭の習ひ乗合船の如くなり、ヤアよい序じや權四郎さんお尋申す事もある、別の事でもない此惡さ殿連て順禮なさる、までは色黒に肥ふさりて年より脊も大からに、病ひ氣な

ふてほんの赤松走らした様に門を家さ遊びやるを見てはア、あやかり者じやさ羨んだ子が何として又此様に色白に瘦けて思ひなしか顔のすまぬもかばつて脊も低ふよはく、さ外へまては一寸出すあれが順禮の寄特か觀音様の御利生かさ、打寄ては是ざたマめんよな事やと、尋れば、されば其事いの、ありや前の槌松じやござらぬ違ふたく、其違ふた譯思ひ出すものふ恐ろしやマ、聞いて下され、コリヤ娘よ、何日の夜やら有たなハテ廿八日のチ、それく又後の月の廿八日三井寺の札を納めて大津の八丁に泊る夜、何かは知す御上意じや捕たく、大勢の侍がコレ見さしやれ咄しするさへ身が震ひます、ほんの世話にいふうるたへて

は子を逆さまごふ貢ふやら娘が手を引たやら走つたやら、飛だやら漸々毒蛇の口を遁れ逃げてゆく先は又狼谷、谷の水音松吹風も後から追手のくろ様に思はれ、扱も命は有ものかな、眞黒の夜に四里たらずの山道を息一つつかばこそ水一口呑ばこそ命からんく伏見へ出て初めて脊に貢た子の顔見ればヤなむ三寶柩宿の襖ごし背に咄しもしたわろが、連た子を取違へたに極つた、太儀ながら一走り往て、もさくへ取かへて来てくれと娘はせむ、チ、尤じやく取戻してこふと思ふ程先のこわさ、いかなく一足も行れるこつちやないわいの、今には限らぬ取かへす折が有ふ、先のわるも子を取違へ、人の子じやきてごろくへるくにはして置ぬ

答。ハテ此子さへ大事に育て置たら  
 三十三所の觀世音のお力、ハテ枯た  
 る木に花さへ咲じやないか、マ、マ、  
 一先内へ戻つて漬した肝をいやし  
 てから上の事さ、晝船に飛のつて戻  
 在中、乳呑ふ泣、持合せたを幸ひ  
 に娘も乳呑せたらそれなりに月日も  
 立ち名も知れば手付た植松よ、こ  
 言や我名と心得祖父よ、こ馴なじ  
 む、いたくしき、今ではほんの植  
 松めも同前にかはゆござると言聲も  
 咽につまらず老心娘も俱に涙ぐみ  
 時の災難とは言ひなむら縁有げこそ  
 此子も手盥にかゝり他人がましうも  
 するここか、様、こ此乳を呑も  
 すりや呑しもすれなじめば我子も同  
 じ事此子憎いでは夢聊かなければも  
 けふの亡者の手前も有、ならふ事な

ら、てつ取早ふもさ、へ取戻した  
 ふござんすき、語るを聞てさ、娘達  
 ナ、それで疑ひ今晴たわいの大願立  
 ての西國廻り現世未來の觀音様の引  
 合せ、あつちからも植松を連れてやが  
 て尋れて見へましよぞいのふ、コレ  
 必ずさなく思はぬがよいサア皆の  
 衆餘りお茶呑でつくおなかも晝さ  
 かりいざござれお暇さ打連れ出る門  
 の口權の先に笠かつ付打かたげ立歸  
 る舞の松右衛門ホこりや皆お歸りか  
 けふは前の舞殿の三年忌、内に居て  
 俱々御馳走申す答を通れぬ用事で罷  
 り出で近頃の亭主ぶり、まそつと緩  
 りさはなされいで、イヤモまそつと  
 の段かいの、ゆるり鐘子の底た、い  
 て歸ります、コレ餘り茶には福があ  
 る、呑でお休みなされやと住家、

と立歸るハア親父様今歸りました、  
 茶事の間に逢ふ釜の下でも焚ふと氣  
 がせいても相人はせかぬ大名のゆつ  
 たり、遅なげつた、嘸お草臥女房さ  
 も太儀であつたの、何の太儀な事は  
 ない、お前こそ嘸おひもじかるコレ  
 ほんよ、さ、様お歸りなされたかさ  
 なせお傍へいきやらぬ、ざりやま、  
 上ふと立上る、アイヤ女房共、まだ  
 ほしうない、望な時にこちらから言  
 ふ、扱申し親父様、大名の中に混原  
 殿は取分の念者さ申か違ひはない、  
 お召に寄て船頭松右衛門、參上と與  
 へ言て行、や、暫くして御家老の彼  
 番場の忠太殿がお出なされ、先達て  
 指上た逆鱗の事書、一つ、尋る程  
 にける程に問殺した其上で其通申  
 あきよ、暫く待よふ暫くで有ふぞ、

な、の三時待せておいて、殿が直に  
お逢なさるゝ是へお出なさるゝと其  
重々しき、物言のかたくろしき、船  
頭松右衛門とば儂な、智謀軍術逞  
ましき義経へ此景時が能存せし言  
逆艦の大事疎に聞請がたし、儂舟に  
逆艦を立ての軍調練したる事や有、  
それ聞んご問かけられ、此度親父様  
に習ふて逆艦といふ事初て知た此松  
右衛門、返答にこまるまいか、申難  
儀せまいか、ほつこせしむ分別致し  
ハ、御意ではござれ共、寶船の船  
頭ふでい軍といふものは夢に見た事  
もござらぬが、逆艦の事は我等が家  
に傳へよく存じて罷有まするなご、  
申て間に合をマ言たればムさいも有  
なん然らば汝覺ある船頭をかたらひ  
今宵密に逆艦を立、舟のかけ引手練

して、其上に知せよ、事成就せば御  
大将の召舟の船頭は汝たるべし、御  
褒美は此梶原も取持なかく船頭の司  
こそして莫大の財寶を下さりよと有る  
直のお詞其嬉しきに初めの術なき打  
忘れあたるたご歸りがけ日吉丸の船  
頭の又六灘吉の九郎作、明神丸の富  
藏、こいらは梶原様のお船の船頭、  
幸三人を相手にして日暮から逆艦  
の稽古に此方へ参る筈、御教へなさ  
れた手際を見せ付立身出世はたつた  
今、是を申すも御指南のおかけ添  
い、コリヤ坊主よ悦べ結構なべ  
く着せて持遊びに飽せふぞよ、女房  
共、親父さん、たんご悦んで下され  
ませと語る舞より聞嬉しき、イヤサ  
不器具なやつは千年萬年教へても埒  
ちや明ぬ、まんざら素人のわか様か

入舞にわせられて一年も立や立す、  
天下様の弟御の召さるゝ御舟の船頭  
する様になるさいふば、おれが教へ  
たばかりじやない、其身の器用がす  
る事でおじやりますよ、目出度い  
ハ、い、い、い、舞殿の草臥休め娘酒  
なご買てこぬかいアイヤ、い、い、御  
酒も歸りがけに九郎作が所で下され  
て呑さふない、イヤモ一生覺へぬ大  
名の付合膝はめりつく氣骨は折る播  
磨灘でようつ風に逢ふた様なめにあ  
ふて頭痛まじり草臥たさいふ段では  
ない暮まではまだ間も有る親父様御  
赦さりませ、さろ、い、い、一寝入り、  
およしコレ見や坊主めが眠るは幸  
さい、か添乳せん、ねん、い、ころさか  
き抱き納戸の内にぞ入にける。娘よ  
裾に何でも置たかよ、出世する大事

の体風ひかすなよ、ヤレ／＼目出度い／＼祝ふて船玉様へ燈明もさばせ御神酒上たい買てくれぬかい、買までもない是をお供へなされませこ棚からおろす難波焼、ム／＼ちるりこ用意がへ／＼有たなご老のしやれ言、輕口も神惠へ重き一對の徳利に餘る親心、妻は火燧の石の火に夫の威光耀けよ油煙も細き燈明に心をてらす正直の神や光りを添ぬらん。

(床本) 逆櫓の段 (切)

M 妻や戀ふ鹿の果ならで、なんぎ硯の海山と、苦勞する墨憂事を、數書くお筆が身の行方、いつ迄果し難波瀉、福島に来て言さへば、門に印のそんじよ其處と、松を目當に尋れ寄り、御免なりましよ。松右衛門様

は此方や、お名をしるべに逢々尋れ参つた者、お逢なされて下さつたら、忝うござんしよと、物ごしの淑かさ。アレ父様、松右衛門殿に逢ひたいと女子が來た、ろくな事ではあるまいと、跡先知らで女氣の、早や愀氣する詞のばし。けうがる、たしなめ。松右衛門に逢ふて、姉じやさいふても愀氣するか、夫程氣遣ひなら呼込んで逢はせぬ先に聞いたがよい。ごなたちや女中、何處からござつた。松右衛門内にゐまする、遠慮せずさ這入らつしやれ。それはまあ／＼お嬉しやと、笠解き捨て内に入る。お前が松右衛門様か、お近付でなければ、お顔見知らふ様は無けれど、無けれどなりや何故ござつた。サア申し、何がしるべになら

ふやら、攝州福島松右衛門子楢松と書いた笈摺の縁になつて、ヤア、そんなら此方は大津の八丁で、又跡の月廿八日の夜の。アイお子様を取りがへた者でござんす。道理で見た様な顔ぢやと思ふた事。是は夢か、現かいのう。およし悦ごべ、楢松を取違へた人じやさやい。此方からも行方尋れて、もこ／＼へ取戻も咎なれど、何を證據に尋て行かう手がかりもなく、泣て斗かり居りました。其代りには取ちがへた其方の子供衆、兎の毛で突いた程も怪我させず、蟲腹一度痛ませず、娘が乳が澤山な故喰物はあしらひ斗り、乳一度あまさせず、チ、それよ。風一度ひかさばこそ、親子が大事にかけたに付けても、此方の息子めも、嗚御厄介お世

話であらう、よう連れてきて下さつた、忝ないく、わるさよ。我内を忘れたか、何故這入らぬ。いや門にてはござんせぬ、エ、連の衆が跡から連れてお出なさるゝか、無御厄介、忝ないく、はて早う逢ひたいな、娘お禮を申しやいの。父様せわしない、此お禮がちやつきりちやつこ、つい云ふて濟む事かいな。申し此蘧松はなげ遅い、お連の衆が門達はなされぬか。此蘧松はなげ遅い。我手は如何に、孫は如何にぞ立ち替り入れか、門を覗いっ禮云ひつそゝろに悦ぶ親子の風情、お筆も胸に焼金さす、今更何ぞ返答も、泣くも泣かれず差うつむき、暫らく詞もなかりしが、お願ひ申さで叶はぬ譯あつて、恥を包み面目を凌で尋れ参

りしが、さうお悦びなされては、氣がおくれて物が申されぬ、マア下ゝにゐて下さんせよ、涙ながらに押靜め。改ためて申すもあぢきなき其夜の騒ぎ、手ばしかう逃げ隠れなされた、お前方は巡禮の功德、此方は一人は病人なり、男さては有に甲斐なき年寄、逃るも隠れるも心に任せず取違いた其御子は、其夜にあへなくなり給ふま、聞いて悔り、まは何故にまはいかにさ、餘りの事に泣きもせず、仰天するこそ道理なれ。人の身の仇なりま、豫ては聞けご其夜の悲しさ、ようも今日迄は存らへし、云譯ながらの物語、聞て恨を暗てたべ高うはいはれぬ事ながら、連の女中ま申すは私の御主人、騒ぎに取違へしは、思ひもよらぬ、若君は猶大

切さ私をかき抱き、御病人の女中は親か手を引き、一度は旅籠屋の憂目は通れ出たれども、追かくる武士の大勢、氣は禁噓さ防いでても、何さいふも老人の云ひがひなく討死し、若君は奪ひ取られ、氣も狂亂の様になつて、女中もほつたらかし、大事の若君取かへさんご馳け廻る、月なき夜半の葉隠れ、尋ね廻はる笹垣の薩サア爰にこそ若君は有れま、取上て見たれば、悲しやお首がまうなかつた。よく見れば若君でない。證據は此笈摺、騒の紛れに取違へしな扱は若君のお命に恙なかりけりま、一度は安堵せしが、替りを戻されば取かへされぬ若君、もさくへ取戻す種になる、人の大事の子を殺し、何を替りに若君を取戻さう、悲しい

事をしやつたさ、夫を苦に病み、主君の女中も、其座で果敢なくなり給ひ、悲しみやら苦しみやら、私一人が脊たら負ふた身の因果、此笈摺をしるべにて、尋れ参りしは、お果てなされたお子の事は諦めて、此方の若君を戻して下さるゝ様のお願ひ、大事にかけてお世話なされたさ、物語聞くに付け、面目ないやら悲しいやら、あぢきなき身の上を、思ひやつてたべ親子御様さ、かつばさ伏して泣きければ、祖父は聲こそ立てれども、涙を老に噛ませて、咽につまればむせ返り、身もうくやうに泣きければ、娘は心も亂るゝばかり、失しき笈摺手に取つて。やれ榎松よ、かくなるは、夕べの夢にまぎゝこ前の父様に抱れて、天王寺参りしや

るさ見たは、日こそ多けれ、父御の三年の祥月なり、命日のけふの日に便り聞く告てこそありつらん。夫さは知らぬ凡夫の淺ましき、今日は連れてくるか、明日は戻りやるかさ、待つて計り居たものを、大な災難に逢つて、笈摺に書たせんもない、是が何の二世安樂、巡禮も當てにはならぬ、観音様も臍甲斐ない、恨めしや、なつかしや、あはれ此事が夢であつてくれかしさ、顔に當て抱きしめて聲をばかりに身を悶へし。前後不覺に泣ぬたる。娘ほへまい、泣けば榎松が戻るか、世迷言云や、二度坊主めに逢はれるか、豫て愚痴な老爺が呵るをどう聞てさ、いふ詞に縫り付き。夫々かう申す私も女子じやが、愚痴では濟まぬ、祖父様の被

仰る通り、いか程お歎なされた逆、榎松様のお歸りなさるさいふではなし、再び逢るゝさいふでなし、さつぱりさ思し召し諦めて、此方の若君をお戻しなさつて下さつたら、ア、有難い忝けないさ、悦ぶ私心かゞこへ行かう、榎松様の未來の爲めには、佛千体、寺千軒、千部萬部の經陀羅尼、千僧萬僧の供養なされたよりの。女子黙れ何の面の皮でがやゝ願たゝく、恥を知れやい、我子を我育るには、少々怪我させても不調法があつても、親だけに濟めども人の子にはな、義理も有り、情もある。主君の、若君のさおいやるからは、夫知らぬまんざらの賤しい人でもなささうな、此おれは、親代々揖柄を取て、其日暮の身なれども、お

天道様が正直、大事にかけて置たそ  
つちの子見せう。いや見せまい、見  
やつたら目玉でんぐりかへらふぞ  
人の子をいたばるは、此方の子をい  
たはつて貰ふかはり、大抵大事にか  
けたと思ふかい。コリヤそんなら又  
なぞ尋れて来ぬさ減す口ぬかさうが  
尋れて往かうにも何もしるべの手が  
りばなし。其方には笈摺に所書が  
あり、今日は連てきて取りかへるが、  
明日は連れてきて下さるか、逢ふた  
ら何んさ禮云はふさ、明ても暮ても  
待てばつかり。コレ此襖を見おれ、  
可愛いや植松も下向に買うさいふた  
を聞分ず、無理に買ふて三井寺さん  
かい、持て歩いて嬉しがつた、鬼の  
念佛に餓鬼げほう殿のあたまへ、梯  
子さいて月代その大津繪、蒔の花の

お山も買をらず、げほう殿の繪を買  
うたばあのやうに、髷の白髪になる  
まで、長生しるる瑞相鬼のやうに達  
者で、金持で世界の人を、餓鬼の様  
に這ひかゝましむらう吉左右じや。  
めでたく戻り居つて見をつたら、無  
悦ばうと貼つて置いて待たに、思へば  
梯子はげほう天窓の下り坂、鬼の傍  
に、はいつくげふ餓鬼になつてお念  
佛でたすかる様になりをつたか。思  
へば思ひ廻す程、身も世もあらぬ、  
よう大それた目に逢はせたなあ。そ  
れに何じや、思ひ諦めて若君を戻し  
て下され。町人でこそあれ孫が敵、  
首にして戻そうぞこつち立あがる。  
なう悲しやと取つてお筆を押して退け  
はれ退け、納戸の障子さつと明れば  
こはいかに、松右衛門若君を小脇に

かい込、刀ぼつ込み力士立、お筆驚  
き。ヤアな様は、あの樋口の。コ  
リヤ女、ム、聞えた、最前歸り  
がけ下の樋の口で、ちらさみた女中  
よな。若君は身が手に入て氣遣ひな  
し、いふてよければ身も名乗る、合  
點か、必ず樋の口を樋口など、庵相  
いふまいぞと、目交ぜで知らせば打  
うなづき。しづまる女、聞ぬ祖父。  
松右衛門出かしたりな、先刻にから  
のもやくや、寝られはせまい、聞た  
であらう、其方が爲にも子の敵、其  
小兒づたくに切刻んで、女子に渡  
せ。いや、さうはいたすまい。なぜ  
致すまい。サア夫ば。サア夫ばさば  
エ、水臭い言いでし知れた、儂も種  
を分けぬ植松が、敵じやによつて致  
さぬな。その根性では祖父が儘にも



さしやせまい、まう破れかぶれじや  
 おれが云ふやうにせぬからは、親で  
 も干でもない。娘其處らを駈け廻つ  
 て、若者大勢呼んで来いさ氣を急い  
 たり。やれ待て女房、人を集むる迄  
 もなし、親父様、どうあつても、樋  
 松が敵、此子を存分になさるか。く  
 どい。ハア、是非もなし、此上  
 は我名を語り、仔細を明かして上の  
 事と、若君をお筆に抱かせ上座に直  
 し。權四郎頭も高い。天地に轟く鳴  
 雷の如く、御姿は見すさも定めて  
 音にも聞つらん、是こそ朝日將軍、  
 義仲公の御公達駒若君、かく申す我  
 は樋口次郎兼光よと、いふに親子は  
 荒肝取られ、呆れ果たる斗なり。樋  
 口お筆に打向ひ、扱々女のかひら、  
 敷、跡々迄も御先途を見さくくる神

妙さ、山吹御前も思ひよらぬ御最期  
 御身が父の準人も敢へなく討死した  
 りさな。力落しと思ひやる。それに  
 つけても斯である、樋口が身の上、  
 咄不審。若君のためには祖父ながら  
 多田の藏人行家さいふ、無道人を誅  
 罰せよこの御意を、河内國へ出  
 陣の跡、鎌倉勢を引受け、粟津の一  
 戦誤りなき、御身をやみくも御生  
 害遂げ給ひし、我君の御最期の鬱憤  
 直ぐに馳け入り、一と軍さは存ぜし  
 かと、思へば重き主君の仇、術を以  
 て籠頼義經を討取り、亡君に手向奉  
 らんこ、此家に入舞し、逆鱗を云ひ  
 立て早禰原に近附き、義經が乗船の  
 船頭は松右衛門と事極る。追つけ本  
 意を途る様になるにつき、此若君の  
 御在所は何國、いかんならせ給ふこ

心苦しき折も折、最前よりの物語、  
 障子越しに聞くに付け、見れば見る  
 程面やつれ給へども、紛ひもなき駒  
 若君。さては思ひ設す願はずして、  
 所こそあれ、日こそあれ、其夜一所  
 に泊り合せ、取かへられて助り給ふ  
 若君は御運強く殺されし樋松は、樋  
 口が假の子と呼ばれ、御身代に立たる  
 は、二心なき某も、忠臣の存念、  
 天の冥慮に相叶ひ、血を分ぬ子が子  
 となりて、忠義を立し其嬉しき、何  
 に類ひのあるべきぞ。是も誰が陸親  
 父様、子ならぬ我を子となされ、親  
 ならぬ我を親とする樋松、恩もあり  
 義理もあり、餘所外の子と取りおへ  
 ての敵ならば、そこは御堪忍なされ  
 うが、女房がよしに申すも、其  
 敵安穩に置くべきか、親父様の御歎

き、我も不憫さは身に迫れども、相  
手に取れぬ主君の若君、弓矢取る身  
の上には、願ふてもなき御身代り、  
祖父親の名を上た槌松、其名を上た  
もさはこいへば、私を子とされ  
し親父様の御厚恩、千尋の海蘇迷廬  
の山、それさへ御恩になか／＼くら  
べがたけれど、まだ其上に大恩ある  
主君の若君、孫の敵まで祖父様に切  
らされうか、我手にかけて主殺しの  
悪名が取れふと、花は三芳野、人は  
武士、末世に残る名こそ恥かしけれ  
御立腹の數々、お歎の段々、申上ふ  
様はなけれど、親さなり子さなり  
夫婦なる其縁に、つながるゝ定り  
事ご思召し諦めて、若君の御先途を  
見届け、まだ此上に私しが、武士道  
を立てさせて下されば、生々、世々

の御厚恩、聞分てたべ親父様と、身  
をへりくだり詞を崇め、忠義に擬つ  
た樋口の風情、兼平、巴が願をふま  
へ、木曾に仕へし四天王、其隨一の  
武士と、世に名を取りしも理りなり。  
權四郎はたご手を打て。そうじや、  
侍を子に持たば俺も侍、我子の主  
人は俺がためにも御主人。ハ、サ  
ア、  
理、二度丸額になつて、喝食する法  
も有れ、恨みも残らぬ、悔みもせぬ  
泣きもせぬ、娘精出して早う、又槌  
松を産で見せをれ。扱は御得心まの  
りしか。ハア、忝けなやこ、互ひの  
心ほごけ合ひ、千里の灘の漂船、湊  
見付し如くにて、挽びあふこそ道理  
なり。お筆嬉しく若君を、樋口の次  
郎に手渡し、其處にかくれておはす

れば、此お子に氣遣ひなし、浮沈は  
世のならひ、わたしが妹此津の國に  
勤奉公するご聞く、それが行へも尋  
れたし、大津で討れし親の敵、討て  
亡者へ手向たし、何やら彼やら事し  
げき、私か身の上早お暇さ立上れば  
そう聞てさめるも不調法、エ、残念  
なむら我等の身分、力に成らうごも  
得申さぬ、お勝手に申出でなされ。  
筆殿はてもぎだうなせめて、二三日  
足休め。夫々父様のおつしやる通り  
かうお心お解け合へば、初何のかの  
ご申した程結句名残あり、ひらにこ  
留てもごまらぬ氣、涙にくれん、若  
君を、頼まるゝの頼むのさいふ中か  
いの、本意を遂げて又御出で。さら  
ばくご門送り、見送る袂見かへる  
袖、お筆は別れ出てゆく。扱てく

武家に育た女中は格別、娘今からあれ見習へよ。こりや爰に七面倒な笈摺が有る、ごこへなりごごつと捨てしまへ。親父様夫は餘りな思召切り、せめて佛前へ直し、香花も取り、逆様な事ながら、御回向なごつて取さつしやれましょ。侍の親になつて、未練なご人が笑ひばせまいか。何の誰が笑ひましょ。ハア、嬉しやく、有様は先刻にからそうしたかつた、娘納戸の持佛へ火を點せよ、手に取上る笈摺の、千年も生そうご念ふたに、たつた三ツで南無阿彌陀佛、槌松聖靈頓生菩提。尊殿ござれ、娘も来いご見れば見かはす顔と顔、俱に涙に暮の鐘、かうくごこを聞へけれ。早約束の黄昏時、又六を先に立て、富藏、九郎作

三人連、門口から用捨なく。松右殿内にか、約束の通り参つたご高呼はり。チ、待つて罷なりますご、身輕に拵へ飛で出て、御大儀々々入つて煙草でも参らぬか。いや、大事の急ぎの御用、一ご精出して跡での田葉粉、しつほりご先づやりませうぞや。チ、ごもかくもご、皆川岸に下り立て、つなげる船の渡海作、纜解き捨て飛乗り、ナフ松右殿、船で妻子を養ひながら、恥かしいが終に逆鱗さいふ事は。チ、知ぬ答、何事も俺次第教てやる。サア九郎作ご又六は、おも梶さり、梶の鱧を立た富藏はへお出なされ、俺がする様の鱧を立た、是皆の衆、此様に舳から、鱧へ向けて鱧を立る、是を逆鱗さいふはいなう。惣て陸

の戦ひは、敵も味方も馬上の働き、駈げんご思へば駈け、退かんご思へば引く事も、自由げに見ゆれ共、船さいふ物は又格別、知つての通り汐に連れ、風に誘れ鱧拍子立て、押す時は、行く事も早けれご、乗戻さんご思ふ時は、おも梶さり梶の風波を考へ、取梶柄の手の内、船をぐるりご本の如く、押廻して漕戻す、それさへさす汐、引汐にもごかふて、船に過ちあるごきは、八萬奈落の憂目を見、いごし可愛妻子に再び、逢はれぬじやないか。いかにもさうじや其憂目を見まいたための此逆鱗、サア其鱧の鱧を押たく、おつご心得、やつしつし、い、やつしつし、三段斗り漕出す。サアかう船を漕ぎ寄て追まくつて戦ふ時、謀ごに乘らる

いか、敵に新手が如ほるか、すは眞軍と見るときは、船押廻す迄もなくこれ此際押し立て、富藏合點か、合點じやく、やつしつし、し、やつしつし、元の所へ漕戻す、透を窺ひ富藏、九郎作、梶おつ取り、松右衛門が諸膝確いて、打ち倒さんと左右より、はつしと打つ、心得たりと躍越へ、陸へひらりと飛び上れば三人續いて駆け上り、ヤア卑怯なり松右衛門、僧木曾が郎黨、樋口の次郎兼光さいふ事、梶原殿能く御存じなされ、逆鱗の稽古に事寄て、搦捕り連れ來れど、我々に仰付られた。尋常に腕廻すか、打のめして繩かけうか、腕を廻せと罵しつたり。樋口からくど打笑ひ、推量に違はぬ上は何をか包まん、朝日將軍義仲の御

内において、四天王の隨一と叫れたる樋口の次郎兼光、儼等ふぜいも搦ざらんとは、眞汐付たる一番碇、蟻の引に異ならず。ならば手柄に搦て見よ、ヤレしやら臭い廣言、跡に云へど、權振り上げ、なぐり立るを事もせず、かひくつて引たくり、先に進みし富藏が、頭微塵に打碎けば、一人ではかなはぬぞ、二人か、つて手に餘らば、打ち殺せと立別ればつしと打つ。さしつたりとひらく身に、權と權とは相打ちに、互の肩間あいたしこ、ためらふ隙についこ入り、權引たくり捨たりける。組んで捕らんさむりむさん、取付く二人を引寄せく、力に任せえいうんと踏くだく天窓の皿、微塵に碎け死んでけり。さあ安からぬ若君の、一大

事何とせん、我身をいかにさためらう胸に、ひつしと響く鐘太鼓、數百人のおめく聲、こは如何にくど驚く中に心付き、屈竟の物見櫓、ござんなれさかけ上る門の松、顔にべつたり蜘蛛の巢や、松葉の針であいたして、目さす斗りはくらからぬ、茂る櫓のおぼる月、四方をきつと見渡せば、北は海老江長柄の地、東は川崎天満村、南は津村三つの濱、西は源氏の陣所々々、人ならぬ所もなく天の魚がせる篝の光、扱は樋口を洩すまじ、取逃さじこの手配りよな。さもあれいかにと飛で下り、女房ども、親父様々々と呼び立る。イエ父様は、納戸の壁をこぼつて、ごつちへやら行かした。ヤア、壁こぼつて失せたさば、ムウ讀めた、訴

人にうせたな。財寶をむさぼつて訴人する。豫ての氣質ではなけれども槌松が仇を忘れかれ、それで失せたか。ハア樋口程の武士が、船玉の誓言に、氣を奪はれ心を赦し、飼犬に手を喰はれたエ、口惜や無念やぞ、拳を握り、齒を鳴らし、しほれぬ眼に泣き涙、磨きたてたる鏡の面、水をそぐが如くなり。お腹立は理はりながら、父様に限つて、よもやそうではあるまいと、云ひなだむる折こそあれ、組の捕手の腰明り、武威かややかす高提灯、島山庄司重忠、權四郎に案内させて見えければ、娘はそれと見。父様恨めしいと云はせ

もあへず。訴人の恨、云ふなく。おれが訴人せいでも、松右衛門を樋口の次郎とば、梶原殿が能く御存知なされて、富藏や九郎作に、搦めさらさうとなされたぢやないか。それ斗ぢやない、四方八方を取かこんで樋口が命は籠の鳥。何ぼ助うと思ふても助からぬ、おれが秩父様へ訴人したは、槌松めも事と、サア其槌松が事を云ふて、松右衛門殿が腹立て何の腹立る事がある、親子さいふ名につながられて、孫めが親と一所に、あつち者になりをらうと悲しさに、あれは樋口が子ではござりませぬ、死だ前の舞殿の、ナ松右衛門が子で

ナ合點がいたか、ほんの親子でござらぬからは、訴人いたした代り、孫めが命お助なされて下されと願うたれば、段々聞し召し分られ、天下暗れて孫めが命は、チ、慮外ながら、此祖父が助けた。それに何ぢや樋口が腹立た。ヤイ儕が子でもない主君でもない、若君でもない大事の、おれが孫を一所に殺して侍が立つか。若い其大きな眼にも、祖父かくだく心の數々は、見えまいぞ。恨めしいとぬかす儕が、けつく祖父は恨めしいと、氣を急き上てくもり聲よう訴人なされた、有難しと過分さも、いはぬ詞は云ふ百倍、嬉し涙

にくれけるが。すつと立て重忠の、  
傍近く、天晴御邊が梶原ならば、太  
刀の目釘のつかん程、切死に死ん  
すれども、粟津の軍妹巴の身の上  
まで、心ざしありしと聞く重忠殿、  
情に及向ふ及はなし、腹十文字にか  
き切て、首を御邊に参らすと、云は  
せも果す。ヤア、死首を取て手  
柄にする重忠ならず、逆も叶はぬと  
覺悟あらば、尋常に繩かゝられよ。  
いや、運盡きて腹切るは勇士  
の慣らひ、繩かゝれは此樋口に、  
生聆かゝせん結構な、仁義ある重忠  
の詞さも覺へず。いや、これ樋口、木  
曾殿の御内に、四天王の随一と呼ば

れ亡君の仇を報はんため、權四郎が  
舞をなつて、弓矢にまさる繪權を取  
つて、大將の船をくつがへし、鑿し  
せんす謀、恐ろしう頼もしう。晋  
の豫讓は、主の智伯が仇を報ぜんこ  
御邊む如く姿をやつし、敵義子を覗  
らふ、其心ざしを深く感じ、着たる  
所の衣服をぬいで豫讓に與へ、其衣  
をきらせて彼が忠義を立てさせしは  
敵ながらも義子が情、木曾殿叛逆な  
らざる事は、書置にあらばれ、御最  
後今さら悔むにかひなし。主人に料  
なき樋口の次郎、まつたく聆をあた  
ふるにあらす、忠臣武勇を惜しみ給  
ふ、大將義經の心を察し、重忠が繩

かくるこ、すつと寄つて、樋口も腕  
捻ぢあぐれば、につこま笑ひ、關八  
州に隠れなき、勇力の重忠殿、力づ  
くには劣らぬ樋口、さらし此腕も  
ぎ放すは易けれど、智仁兼備の力に  
は、及びもない事、相手になられず  
さもかくも計らばれよと、弓手の腕  
を押し廻せば。ヤア、愚か。忠義  
厚き樋口の力に、重忠が及ばんや  
大手の大將範頼公、搦手の大將義經  
公、兩大將の御仁政、文武二つの力  
を取て、縛むる此繩ぞさかくるもか  
ゝるも勇者と勇者、仁義にからむ高  
手小手、繩付を引立させ。コリヤ女  
樋口殿の血こそ分けぬ、槌松もやら

んは大切な子ではないか、喰乞をこ  
ありければ、およしは泣く／＼納戸  
に臥したる子を抱き上げ、コレなう  
暫し假初も、親子を云ひし此世の別  
れ、コレ顔見せてさ差よすれば。ハ  
ツア槌松に喰乞さは、四相を悟る重  
忠の御情、爺の願ひを聞き分け給ひ  
助けおかるゝ忝なさ、誰彼の情も忘  
れぬ。コレ槌松父さいはずに喰乞。  
樋口／＼、樋口さらばと稚子の、誰  
がをしへれど呼子鳥、我は名残もお  
し鳥の、番が離るゝ憂き思ひ、やら  
ん／＼と縫りつき、娘よ、泣くな。  
何ぼやらん／＼と商賣、の船頭で留  
ても留らぬ。ア、悲しや、たさへ死

でも地獄へはやらん、極樂へやる弘  
誓の船頭、思ひ切つてやつてのけう  
船ヲ汐の満干に此子が出来たさな  
孫が身の上案じるな、爺が預かりの  
んわい／＼われが、かはりに大事に  
育てえいよほん、ほんほんに何た  
る因果ぞも、正体もなくどうぞ伏し  
涙にむせぶ腰折松、餘所の千歳は知  
られども、我身につらき有爲無常、  
老ばさゞまり、若木はゆく、世は逆  
さまの逆鱗の松さ、朽ぬ其名を福島  
に、枝葉を今に残しける。



中  
蝶花形名歌鳥臺

小坂部館の段

小坂部館の段

中 竹本文字太夫  
豊澤廣 助  
切 竹本津太夫  
鶴澤綱 造

人形

大友三郎 景澄 吉田 玉七  
小坂部兵部音親 吉田 榮三  
妻 葉末 桐竹 政龜  
妻 眞弓 桐竹 紋十郎  
一子 松太市 桐竹 紋三郎  
一子 笹門宗貞 吉田 光之助  
水海左衛門宗貞 吉田 傳之助  
加藤正清 吉田 傳之助  
木村又藏 吉田 玉幸  
近習 大田 幸

太郎を殺させ、自分も割腹して果て  
双方へ義理を通すといふ悲壯な名曲  
であります。

(床本) 小坂部館の段 (中)

この淨瑠璃は寛政五年七月豊竹座で  
上場したのが初演で全十一段もの。  
小坂部館は八段目で作者は若竹笛朝  
中村魚眼の合作。内容を申上げる  
と、安藝の豪傑小坂部兵部音近を  
敵味方に別れた眞柴、大内兩家が互  
に味方に付けよふと苦心し音近は二  
人の娘である婿の宗貞、正清が各々  
愛兒を使者に遣はし、命を賭して意  
を通そうとする、小坂部は姉娘の葉  
末が成さぬ仲の義理の娘であること  
をかり正清の子笹市に名刀を與へ買  
の娘眞弓の子(宗貞の子)松太郎に  
は鈍刀を與へて眞劍勝負をさせ、松

老ねれば麒麟も駕馬も身退き我領國  
に引籠る小坂部兵部音近、眞柴大内  
の戦ひに寄らず障らぬ老将の胸の器  
も廣書院案内と俱に入來る大友三郎  
景澄斯と知らせに館の主兵部音近家  
に杖つく岩疊作り刀引提げ出迎ひ互  
ひに挨拶事終り今隣國大内を責付ん  
と、眞柴久吉軍を催ふし合戦最中、  
旗下の大友何用あつて入來なるやと  
不審顔なる程貴所にも存じの如く  
某始め列國の諸將久吉の幕下に從  
ふも時の權威、武勇自慢の大内さへ  
責付に勢ひなれど、足下の武名に恐



れてや手ごしもせざるは適家柄、殊に長壽の賀を祝す寸志の品早くくの詞の中家來が運ぶ白臺に巻絹黄金美酒佳肴の癖のころ琥珀の硯珊瑚のつね突のし包み廣椽せしと並ぶれば、眞柴久吉冠者義廣二虎戰はしめ一虎は亡び一虎は勞る、虚を討んと賄賂の麥飯を以てはちすばの我を釣んとは兼々取あへぬ詞に三郎膝すり寄せ、弓矢取つては西國に人も手を置く小坂部殿僅管城の主となし置は残念至極拙者に力を添られなば眞柴大内も討亡し六十餘州を手中に握らば九州一國四國を添へ進上申さ宛もなき雲を便の空頼み、聞も敢ず打笑ひハハハ、甲に似せて穴を掘る鬚侍さは貴殿の事、我鋒先にて切取たる一國一城、恩に着るべ

き主もなければ又向ふべき敵もなし足る事を知て此城に世を我儘の隠居親仁、國郡望におかない、よしなき音物穢はしと商に絹着せぬ老人の詞にべなく言ひ放せば短慮の三郎ぐつと詰掛けヤア一大事を口外させいやならよいばで濟さふか胸を定めて返答せよと切又廻せと見やりもせず餘所に吹なす煙草の煙り、驢め丈夫に氣を吞まれこは氣立ども負ぬ顔、か程言ふても相人にならぬはエ、扱は某が武勇に恐れし物ならん、老人相人もおさなげなし、頼聞れば此進物持歸るに言分有まい、留て見ぬかさ足早に犬の逸吼家來共煩眞紅に枝珊瑚珠、琥珀の 付けなふしよげなつてぞ立歸る後に兵部は眉をかめ鹿をさして馬さいひし馬鹿の上

行三郎景澄數代續きし大友家も斷絶なさん笑止や仁成梅菊の間の襖押明け正清が妻の葉末に引添ひし眞弓と言へど致もなき胸は眞紅に結びたる文箱携へ銘々に父の兵部が右左願ひありげに座に着けば、ホウ兩家雌雄を争ふ時節、事繁き中姉妹共打揃ふて來りしは我賀を祝せん爲ならん思はざる合戦より葉末が夫加藤正清真弓が嫁したる左衛門宗貞、弁さ弁さは敵さ敵、さりながら武士の常珍しからずシテ孫共は堅固で居るか尋に姉は會釋して賀の悦びを幸に参りし様子は久吉様へ何ぞぞお味方ある様こそ是までお勤め申せ共お聞入ない父上様、御勘當遊ばした弟の和三郎今では眞柴の御譜代同然、弁も娘も子も孫も一家一門睡じう同じ

味方に有ならばモ此様な目出度い嬉  
しい事はない、昔氣質を取置て朝日  
と昇る名將へお味方なされ弟も勘當  
赦すさつい一口言て賜はれ父上と我  
身の上と弟も託も一つに取交し姉が  
願ひを打消妹、チ、身勝手な姉様  
私か来たのも同じ願ひ大内の家の兩  
家老武者之助が出海かと言る、勇士  
も眞柴の家臣正清に縁有と義廣様の  
御疑ひ軍のお供も叶はぬ悔しさ父上  
さへお味方有らば夫の明りも立道理  
孫子不便と思すなら大内方へのお味  
方を偏に願ひ上ますと言も涙に曇り  
聲道の父も姉妹が同じ願ひにもく然  
と答なければ猶摺寄り御返答なされ  
ぬは姉様につくお心が若お聞届けな  
い時は此箱の封を切改め見いそ夫の  
言付ソリヤ姉も同じ事お返事の品に

寄此箱を父上に見せて心を定めよこ  
様子有げな夫の指圖御思案願ひ上ま  
すと同じく傍に差置ばム、眞柴大内  
兩家より是迄再三招くと言へども所  
存有て從げぬ我に見せよと兩人の聲  
と聲とが送りし此箱さくと思慮して  
否應の返答、それまでは預り置萬事  
は後程先奥へさ納る父も一思案夫思  
ひの姉妹も上べに笑顔作れども胸は  
蝸牛の角隠す心々を三方へ引別れて  
ぞ入りにける。

(末本) 小坂部館の段 (切)

M 秋は殊更物さびし。千草にすだ  
く虫ならで、臺子の釜の音すみし、  
數寄屋待合前裁の、露路と勝手忍  
び足、隔合ふたる姉妹も、心を先へ  
飛石傳ひ、それと眞弓が、姉様か。

カー、妹爰へは何仕に、エ、聞わた  
わしを出し抜き父上を、大内方へ味  
方に付うと思やるのか。さういばし  
やんすお前こそ、先へ廻つて久吉方  
へすいめる心でござんせう。エ、つ  
べこべこ口こたへ、そこ退やらぬか  
と突退けて、ゆくも姉我意隔つる眞  
弓。邪覺しやんなさ振ほごく、風に  
びやうの柳腰、帶際取つて引戻す。  
腕もかよばき絲薄、亂す黒髪兩方が  
適合ふたる姉妹喧嘩、争ふはづみ縁  
側へ、轉る拍子にばつたりと、思は  
ず開く障子の内、閉を樂しむ音近  
臺子にかかり獨服の、濃茶の手前他  
念なく、出海加藤が妻さいはる、身  
を以て、はしたなき振舞、さりなが  
ら主家を思ふの貞節、さのみは阿ら  
ぬ仲直りば、幸ひ、姉妹中も濃

茶の盃、サ爰へくご機嫌よき、父の詞に葉末に差寄り。今四海一統に久吉様へしたかふ時節、理を非に曲てお味方を。イエく姉様まんがちな、申し父上様、義廣様へお味方せうごつい云ふて下さんせ、ハテかしましい、是非返答が聞たくば、双方共罷ならぬ、此上はそち達が、持参の品を改めよ、取出し渡す以前の箱心濟れごめいくわ、あた蓋明けて取出す、様子は何か白布に。ムウけふの細布胸合すこ、古歌の下の句、手跡は夫正清殿。わたしが方はこれ此扇、ドレく秋來月を視て歸思多し、自ら籠をひらいて白鷗を放つ。ムい、こりやこれ古郷を思ふ詩の心娘共ごこご工夫を仕れ。アイさいへご姉妹が、夫の心白布ご、かけし

扇の判じ物、解けぬ色目を見て取る音近、眞柴が招きに從はざる、舅も舞も心々、けふの細布胸合すこ、一家の縁も如此く、斷切る布は離縁の印し。エい、そんならわたしは正清殿に。オ、そち計りでない妹も、古郷をうしたふ詩を、扇面に書し送りし左衛門。要をはずせし其扇、親骨子骨ばらくに、因を切つたる扇の去状。ハア、はつご計りに詞なく、自には涙の玉手箱、明てくやしき思なり。時しも次より近習の武士。眞柴家より使者として加藤正清、大内より使者として出海左衛門宗貞、只今是へご知らすれば、しほれし葉末も露持心地。オ、よい所へ夫の使者子仲なしたる夫婦合、むてんもさせす去られた様子を。オ、そうでこ

ざんすこも、わたしごても同じ事、お使者であらうが此恨、頼むは姉様呑み込んだご、初めのもつればごこへやら、ほごけあふては引しめる、帯も眞身のおさひひ思ひ。ヤア縁切れたれば他人向、無禮の挨拶仕るな、身も禮服に改めんご、いひつゝ立て奥深く、入る間に程も長廊下、加藤虎之助正清ご、親の名をかる笹市が、まだ十歳のわんぱく盛り。年も相生ふ松太郎、父左衛門も是も又名はかんばしき楠檀の、拳ゆしく打通れば、思ひがけなき母ご母。ヤア左衛門殿ご思ふたは松太郎が、ようおじやつたの、笹市もご、様の御名代じやの、長袴の着ごなしぶりよう似合ふた事わいの、サアくお使者の口上此母へ、イエくご、様

と縁が切れた、お前は餘所の伯母様  
じや。オ、笹市殿のいはしやる通り  
これ餘所の伯母様、祖父様へのお取  
次、お頼み申上ますと、言合はされ  
ど兩方が、利發にこまる母親も、何  
と答も口ごもる、一間にかくともれ  
聞く兵部、老の氣丈の長袴、左右に  
小太刀携へて、作法亂さすあゆみ出  
で、久しく對面せざる中、ハテおま  
なしく生育ちしな。娘が縁に引かれ  
ざる小坂部が性根を知り、縁を切つ  
て孫共、を使者に差こす發明々々。  
がもし此祖父様も承引せずば其儘で  
は歸られまい。とくご思案を定めよ  
と、詞も待す松太郎。此役目仕負せ  
れば、生て屋敷へ戻るなと、とく様  
のお詞と、いひつゝ、手早に袴、上着  
脱げば白無垢袴。母は見るより

オ、さうなうてはならぬ答、大人  
もおよばぬ健氣さを、眞似が成るな  
らごなたでも、して見やしやんせと  
聞けがしの詞も耳に當りさばり。ニ  
レ妹、親の口から子を譽めるは聞  
てはないわいの。アイ、祖父様が味  
方に付いて下されずば、死ぬる覺悟  
に極めてゐます。オ、さうであら  
う、早う用意と袴の、紐を解  
くやらほごくやら、上着脱せば同じ  
くも、下は無紋の死出立、見るより  
はつさは思ひながら。オ、出かしや  
つたのう、眞實極めたそなたの覺悟  
誰も口では立派にいへど、まさかに  
なるご憶病風、出安い物ご初めの嵐  
吹戻されて、コレ姉様、憶病風さば  
誰が事、義によつては命を惜む松太

郎じやござんせぬ。ソリヤこちの子  
も同じ事、父上の御返事次第、立派  
な覺悟見物しや。イア松太郎が覺悟  
を見せう。見事そなたが。お前がご  
我子最負に取のぼし、詞しごるに争  
へば。ヤア無役の論議、左程離縁が  
悲しくば、切つたる縁を縫合す工夫  
はさまん。さりながら汝達は、此  
座に叶はぬ早く立て。うぢんぐと立  
ち兼るば、父が詞を用ゐぬかご、老  
のいら立ち是非もなく、出る心の枝  
折門、親子の中も隔つる切戸、鏝  
かけて、申し祖父様、久吉方へお味  
方あれば、わしや侍が立ませぬ。  
オ、武士が立さうが立つまいが、祖  
父はこつちの味方。イヤさうばなる  
まい。仕て見せう。オ、出かす出か  
す、連れ勇者の悴共、しかし、大内

に付けば笹市が恥辱ならん、さあ  
つて眞柴に從は、松太郎が身の上  
いづれを捨ていづれを取らん、彼の  
獅子の子をためすにひさしく、此場  
に置いて兩人が、眞劍の勝負をこゝ  
ろみ、勝たる方へ祖父が味方、心覺  
えの此二腰、是を以て立合へこ、渡  
せば取つてめい／＼が、腰に遠は武  
士の、小太刀の目釘くいしめし、股  
立ち、しく身ごしらへ、戸の透間よ  
り差覗く、母と母とはあらね思ひ  
年端もいかぬ二人の子供、命にかゝ  
る眞劍の、勝負さすこは餘りな、む  
ごいわいのさかきごごく、親の思ひ  
ぞやるせなき、耳にもかけず音近は  
床に直せし鼓取上げ、我壯年の頃、  
武將足利義晴公、數度の軍功御賞美  
あり、猶も武名を鳴らせよと、笈と

號し此鼓を下し給はり、年賀毎に打  
つが吉例、今六十の賀を祝す、論終  
らぬ其中に、用意よくばこ打鳴らす  
鼓のしらべ、白及の及、抜放して立  
向ふ、互のかけ聲、鼓の矢聲、有難  
や、治まる御代のならひまで、山河  
草木稲かに、五日の風や十日の、雨  
が下照日の光、劍の光、打合ふ及音  
見る目ひやいさあぶなきに、こらへ  
兼てかけ入るを、いつの間にかは物  
影に、忍び姿の宗貞、加藤、制し留  
むれば詮方も、泣げど叫べど白砂を  
一足さらず切結ぶ、武士の育ちの直  
焼及、付け入る刀請けはづし、弓手  
の肩先松太郎、切込まれてたぢ／＼  
／＼。母は見るより悲しさの、心あ  
せれど詮方涙、さもいささよき山の  
井の水／＼山の井の。手疵も屈せぬ

松太郎、尖き及先笹市が、高股四五  
寸切付くれば。アレ笹市が切られた  
わいの、ソレ／＼／＼油斷しやんな  
アあぶない、必ず負けてたもんなさ  
あせりながらも親々が、詞の介太刀  
五角の手練、斬つ斬られつほさばし  
る、血汐染なす秋草も、色を争ふ修  
羅の庭、勝負いづれも氣を配る、父  
と父とは千萬無量、母は外面に血の  
涙、祖父は早むる謠のせめ。君は船  
／＼、臣は水、水よく船を浮べ／＼  
て、臣よく君を、仰ぐ御代さてかへ  
す／＼も、よき御代なれや／＼、萬  
歳の道に歸りなん／＼、深手に弱は  
る松太郎、氣がさの笹市まくり立、  
さやめさ／＼んさ立寄るを。ヤレ待て  
勝負見届けたぞ、娘共は手負ひの介  
抱、早く／＼に母と母、我身をしづ

に東西の鏢はづれ押明くる。疾し  
や遅しとかけ入つて、我子我子に縫  
り付き、オ、嬉しや笹市、そなたは  
淺疵、神や佛のお蔭ぞ、姉は悦ぶ  
妹は、手負にひしさいだき付き、  
介抱愚か泣叫ぶ。ヤア武士の家に育  
ちながら未練至極、笹市勝負に斬勝  
上は、兵部音近今日より、久吉公へ  
味方ぞと、聞くにいそく姉葉末、  
お馬の先の功名にも、まさつた手柄  
と譽めそやす、餘所の悦び子心に、  
聞くも無念と松太郎。エ、わしや負  
けたが口惜い、今一勝負と刀を杖  
立上れどもよろしく。見る目に  
母は堪へ兼て。オ、道理じや、  
道理じやわいなう。武士の意地さは  
云ひなむら、孫は子よりも可愛いと  
世の諺もあるものを、見殺しにす

る片意地は、むじいつれない父上と  
恨の數矢かぞへ立て、言ふも眞弓が  
子に迷ふ、悔みにいさひ苦しさの、  
引入る息を張詰て。ア、か、様、祖  
父様に恨はない、負けたわしが未熟  
から、大事の役目を仕損じた、憎い  
やつじやとさ、様に、しかられうか  
と、それも悲しい、もし尋ねてなら  
笹市に負けはせぬ、怪我につい斬ら  
れたと、いふて詫して下されと、今  
端の際も名を惜む、稚心のいちぢら  
しさ、こたへくし祖父兵部、以前  
の刀抜くより早く、腹へかばと突立  
つれば、ノウ何故の御最期と、右と  
左に姉妹、取付き歎けば氣丈の手負  
眞弓も顔を打眺めて、涙を浮め。オ  
、恨は尤も、さりながら、何をか包  
まん、松太郎へ最前渡せし一腰はな

及びも同じなまくら物、さるによつ  
て笹市も手疵は薄手、斯く計ひし一  
通り、本意なられど言聞かさん、姉  
の葉末は早世し、我兄元胤が忘れ笹  
某とはなきぬ中、同じ血の緒とい  
ひながら、義理ある孫の笹市が、命  
を助け、肉身の松太郎を殺せしは、  
さす敵加藤正清に、縁を引たる親左  
衛門、返り忠もあらんか、主家義  
廣の疑念を晴すは、骨肉の一子を殺  
す義者の潔白、此上なしと思ひ寄し  
も、義理といふ二字が劍となつたる  
かや。月にも花にもかへぬ程、いづ  
れおさらぬ不慙さも、産の娘か生の  
縁、わけて可愛い松太郎、コリヤむ  
だ死さばし思ふなよ。年こそ寄つた  
れ無双の勇者、小坂部兵部音近を、  
そちが刀で此如く、小腕に仕留め潔

く訂死せし、手柄者出、かしおつた  
 と爺親が、響こそすれ叱りはせまい  
 心残さず臨終をさ、義理の孫子と恩  
 愛に、捨つる命の有難さ。姉は元よ  
 り妹が、さうさば知らず父上を、  
 恨んだが勿体ない。これ松太郎聞き  
 やつたが、そなたが死ぬるは爺御の  
 ため、負けたのじやない勝じやまい  
 のう、アノ嬉しうござる、そんなら  
 お前も縁切れず、元の通りにさ、様  
 さ。中よう添ふて下されや。か、様  
 か、様は何處にじや、オ、爰にゐる  
 く、悲しやそなたはもう目が見え  
 ぬかいの。アノ侍の子が、未練な  
 さ笑ばれうか知られども、死ぬる今  
 端にさ、様や、お前の顔がたつた一  
 目。それむくさいふ跡は、舌も、  
 つる、斷末魔。オ、苦しがる。せつ

なかる、其苦痛より此祖父が、斬つ  
 はつゝの度々々を、論駁で紛らして  
 も、肉骨を裂く苦しみは、一百三十  
 六地獄の、苛責を一度に請くることも  
 よも此上のあるべきか、可愛の孫や  
 さ取亂し、歎けば姉もせき上げく  
 孫子のためにお命を、捨て惠の父の  
 恩、船車にも積まれうか、それ計り  
 かはいさし子を、義理の及に殺すの  
 が、悲しうのうて何とせう、こちらへ  
 てたもさ、妹に、手を合したる訛涙  
 アノ姉様の勿体ない、斯う成行くも  
 先の世の、約束事と諦めても、こん  
 なゆゝしい子を殺す、其日もかへず  
 父上まで、同じ及の愛別れ、神も佛  
 もなき世か、手を取かばし姉妹が  
 返らぬ悔み宗貞も、加藤が手前恥ら  
 いて、爰にさだにも得もいはぬ、胸

の苦しき目に餘る、涙見せじこくひ  
 しはる、心を察し正清も。たち兼  
 たる俱涙、親は泣寄り眞實の、涙々  
 に暮近き、秋や哀を添ぬらん。左衛  
 門悲歎の涙をばらひ。一子を殺し二  
 心なき、我も誠忠をあらはすも、悴  
 か孝心舅の情、命を給はる返禮は、  
 再びむすぶ狎舅、ホ、い、正清さ  
 ても左の如し、大内義廣征伐に、小  
 坂部が討死さ、記録を残さば松太郎  
 舅の追福此上なしと、聞くよりにつ  
 こご打笑て。ハ、仁あり義あり、味  
 方ば名のみ相果る、兵部が末期の置  
 土産、笹市にあたへし太刀こそ、我  
 重代北辰の二字を彫し、武運守護あ  
 る七星丸、萬夫不當の正清に、劍の  
 威徳加はりて、和漢に美名を残され  
 よ。此上頼むは末子和三郎、小坂部

九郎音近こ、我若年の名を繼かせ、  
厚恩ある久吉公、御子孫の時に至り  
スハ御大事と見るならば、粉骨つく  
し忠義を立てなば、草葉の蔭より悦  
ぶこ、傳へておくりやれ御殿と、末  
期の一句孫娘。ノウは今も別れかこ  
歎げど更に其かひも、嵐も告ぐる法  
螺太鼓、遠音に響き物凄し、加藤が  
郎黨木村和田藏、かけ來つて大音上  
大内が本城山口は、要害堅固の絶所  
なれば、數日の對陣時を待ち、計知  
つたる海手より、足利慶覺西國へ、  
下向と流布せし六字の旗、武器を隠  
せし兵船に、押立てく押渡る。味  
方は必勝の破竹の勢、急ぎ御出馬  
然るべしと、申し捨てぞ引返す。ス  
ハ一大事と左衛門宗貞、おこらぬ正  
清双方が、忍び装束脱捨つれば、肌

には小具足身をかため、勢込んだ  
る軍場の出立。やをれ正清慥かに聞  
け、久吉樂毅が術をなすこも、味方  
は臥龍が備を立て、只一戦に追散ら  
さん。早く歸つて猿冠者も、首を堅  
固に用心せよ。シヤ案外なる非禮の  
過言、山口如きの破城、正清先陣蒙  
らば、一擲みにひしいでくれん、吠  
頬かはくな、左衛門と互の廣言双方  
が、詰寄り詰寄る勇者と勇者。女房  
々々は正體も、涙ながらにいたはれ  
ど、枯るゝ老木と諸共に、おしやみ  
どりの松太郎、あへなく息は絶へに  
ける。わつこ一度に聲立て、妻が歎  
きに目もやらず、互に白眼相舞同士  
またも聞ゆる攻太鼓、哀れを跡に三つ  
羽の征矢、射るが如くに兩人は、戦  
場さして、**M** 出て行く。





澤市内の段

三十三所壺坂寺

澤市内の段  
澤市内より御寺迄

西國六番の札所大和國壺坂寺觀世音の靈驗を記した名人團平が妻女加古千賀女の筆になり、名人團平が一代の蘆蓄を傾注して節付した名作であります。内容は澤市といふ座頭の女房お里の貞節を叙したものであります。壺坂寺の片ほそりに住む澤市といふ座頭は三つ違ひの美しいお里といふ女房を持つてゐたが、三年この

澤市は女房の貞節に泣いて厚い心に謝しました。が所詮は癒らぬ眼病にいつ迄厄介かけるも壺坂寺の谷へ身を投げます。さかかけつたお里も夫の後を追ふて、ついで身を投げます。その信心の厚さ。女房お里の貞節に觀音の利益をたまひ、身は助かり澤市の眼があくといふ夫婦愛を高唱した絶好の世話もので御座あります。

(床本) 土佐町の段

かた毎夜のやうに家を抜け出して往くので澤市は隠し男があるやうに嫉妬します。實はお里は毎夜夜中に壺坂の觀音様へ参り夫の眼病平癒を祈つてゐたものでした。それと解つた

機織りてかすかおろしておさまきて身ばにつれれをまこへ共心の錦おりかみ行儀も人の鏡ぞも貞女の噂日脚さへまだいさ高き八つ下り土佐町はづれ並木松澁茶の煙立障子休足所つりわらじ往來の人の足引もけふ縁日の觀世音参り下向に聲かけて茶店

妻澤講觀

世 お

音中市里

吉田榮三郎  
大田榮三  
桐竹紋十郎

人形

レツ 切 中

野鶴澤友衛門  
鶴澤友衛門  
豊澤廣太郎  
竹本浪花太夫  
鶴澤友若  
鶴澤友若  
豊澤廣太郎  
竹本浪花太夫

の嬢が呼さめテモ早い御參詣に花も  
丁度おあんばい休んでおいでと波で  
出す花香もよしや吉野膳面々茶碗手  
にさつてチ、權三の嬢精が出来ますの  
ふ今日は十八日でたんとお参り定め  
て茶の錢が上りましょサイナア靈驗  
あらたな觀音様のお影で世過をさし  
てもらふ有難いお恵みと噂まち／＼  
する處へ春の野もせの若草や寢よげ  
に見ゆる肌の色誰がつみそめし初よ  
めな手織着物のこなしよく歩み來る  
を信者は聲かけコレ／＼澤市のお内  
儀ごこへ行かつしやるマア付合に休  
まんせチ、是は／＼皆様方げふは暖  
たか日和もよし定めて觀音様へお参  
りでござりませふモウ私らは日かな  
一日糸を取るやら綿くるやらかせい  
でも／＼追付ぬ貧乏ひまなしさいへ

ばこなたは打笑ひテモ澤市は仕合者  
お嬢の器量よい上に第一男を大切に  
介抱片手の賃仕事ア、逆もの事にお  
嬢の顔たつた一目澤市に見せたいわ  
いのチ、それ／＼あつたら女房を谷  
間の櫻くらがりのぼた餅でアノ澤市  
は味知る斗りおしい事じや／＼さほ  
めそやせばお里は涙笑ひに紛らしチ  
ホ、／＼、皆さんの譯もない目か  
いこそ不自由なれわたしに過た澤市  
様まだ目の見へた時分から言號した  
大事の夫わしや嬉しいと思ふて居る  
成る事なら今一度あの目が明てあげ  
たいさほるりと落す一雫貞女の誠こ  
もらん人々も感じ入チ、尤も至極  
や貞女かな器量がよけりや心造イヤ  
コレお内儀遠くもあらぬ壺坂の觀音  
様を願はしやれこなたの貞女が届い

たら不思議の御利益目の當り随分信  
心さつしやれやハイ／＼有難ふはご  
さんすも賃仕事やら介抱やらで少し  
のひまもない私し又春永にゆつくり  
さチ、そふさつしやれ／＼やまこふ  
言内七ツ下りそろ／＼内へ歸りませ  
うチ、歸りませう／＼内へ歸つて山  
の神にお里女郎の話をして男を大  
事にする様にチ、言てきかそ／＼兎  
角目明の亭主さへ氣儘氣すいの買  
らひ小使錢の、入も目くらに仕おる  
さ銘々が仇口／＼に右左お里も會釋  
笑顔別れ／＼て在所道我家をさして  
歸りゆく。

(床本) 澤市内の段

夢が浮世か浮世も夢が夢てふ里に住  
なむら住ば住なる世の中によしあし

ひきの大和路や壺坂の片邊り土佐町  
 に澤市さいふ座頭あり生れ付たる正  
 直の琴の稽古や三味線の糸より細き  
 身代の薄き煙りの營みに妻のお里は  
 健やかに夫の手助け賃仕事つゝれさ  
 せてふ洗濯や糊かいたものを打盤の音  
 も幽のくらしなり鳥の聲鐘の音さへ  
 身にしみて思ひ出す程涙が先へ落て  
 なぐる、妹脊の川をチ、是はく澤  
 市様けふは何と思ふてやら三味線出  
 してよい機嫌じやのホ、チ、お里  
 かそなたアノおれが三味線弾をよい  
 機嫌に見ゆるかやアイナアハテナア  
 おりやそんな氣じやないわいのモウ  
 くく、氣が詰つてく、いつそ死で  
 ものけふエ、イヤサアノ死んで仕廻  
 程氣がふさいでならぬわいのふイヤ  
 コレお里わしやそなたにチト尋れた

い事がある。マアく下に居やく  
 ハテ扱下に居やいのふ外の事でもな  
 いがいつぞは聞ふく、と思ふて居た  
 が丁ご幸ひ光陰矢の如しとやら月日  
 の立ばマ、早いものなアソレ初がみ  
 ぞおれがコウ一所に成てからモウ三  
 年稚い時より許嫁互に心も知つて居  
 るにマなせ其様に隠しやるぞさつば  
 りと打明て言てたも、何處やら濁る  
 詞のほしお里は更に合點行かずふし  
 んながらにコレ澤市様そりやお前何  
 を言しやんす嫁入してから三歳のあ  
 いだもほんにく、露程も隠し立した  
 事はござんせぬ、夫共に何ぞ又お氣  
 にいらぬ事有ば言て聞して下さんせ  
 サそれが夫婦ぢやないかないなム、そ  
 ふ言やればこつちも言はふチ、何成  
 共言しやんせチ、言はいでかコリヤ

お里マよふ聞けよわれと夫婦になつ  
 て丸三年毎晩七つから先寢所へ手を  
 やつても終に一度も居た事がないソ  
 リアもうおれは此様な盲昧にゐら  
 泡瘡でモ見る影もない顔形ぢふで我  
 の氣に入ぬは無理なられど外に思ふ  
 男も有らばさつばりと打明けて言ふ  
 てくれたら此様に何の腹を立ふぞい  
 尤もわれとおれとは従弟同士専ら人  
 の噂にもアノお里は美しいく、こモ  
 聞度事におれはもふよふ諦めて居る  
 程に情氣は決してせぬぞやコレどふ  
 を明して言てたも立派に言へど目  
 にもる、涙呑込盲目の心の内ぞせつ  
 なけれ聞にお里は身も世もあられず  
 縋り付てエ、ソリヤ胸怒な澤市様い  
 かに賤しい私じやめて現在お前を振  
 り捨て、外に男を持つ様なそんな女

と思ふてかソリヤ聞へませぬ〜エ  
聞へませぬわいなモ父様や母様  
に別れてから伯父様のお世話になり  
お前まへ一所に育てられ三つちがいの  
兄さんさいふてくらして居る内に情  
なやかなさんは生れも付ぬ瘡瘡で目  
かいの見へぬ其上に貧苦にせまれど  
何のその一旦殿御の澤市様たごへ火  
の中水の底未來迄も夫婦じやと思ふ  
計かコレ申お前のお目を治さん此  
壺坂の観音さまへ明けの七つに鐘を  
聞きそつと抜出で只一人山路いとは  
す三年越せつなる願ひに御利生のな  
いさはいか成報ひぞや観音様も聞へ  
ませぬさ今もいまして恨んで居たわ  
しの心もしらずして外の男おとこもある様  
に今のお前まへの一言は私わたしばらちが立わ  
いのとくどき立たる貞節の涙の色ぞ

誠也始て聞し妻の誠今更何ぞ澤市  
が詫の詞も涙聲アコレ女房共何に  
も言ばぬ堪忍してたも誤つた〜  
〜わいのふモウそふさはしらすか  
たわの癖に愚痴計りコレこらへてた  
もれと斗にて手を合したる詫涙袖や  
袂をひたすらんアコレ連添女房に  
何の詫お前の疑ひ晴たれば私しや死  
んでも本望じやわいな〜イヤモウ  
そふ言てたも程わがみの手前面目  
ないわいのふが夫程に迄信心してた  
もつてもおれが此眼はコレマ治りば  
せぬかいのエソリヤマア何を言は  
しやんすぞいな此年月のうき艱難雨  
の夜雪の夜霜の夜もいさばぬ私わたしは  
だし参りも皆お前の爲じやぞヘサア  
夫程に祈誓をかけ願ふてたもつた志  
有がたい共嬉しい共其貞節なそなた

をば此年月の廻り根性観音様じやと  
いふたさて罰こそあたれ何のマア此  
目が明いてたまるものか、エ何の  
いな私わたしのからだはコレイナアコレお  
前の體も同じ事そんな愚痴を言ふよ  
りちやつさ心を取なをし観音様へ俱  
々にお頼み申し下さんせ〜ご夫を  
思ふ貞心の心づかひぞ哀なり。澤市  
涙にくれながらチ過分なぞや女房  
共そふそなたが一心のすばつた上は  
御佛の枯たる木にも花がさくさやら  
見へぬ此目はかれたる木ア〜ごふぞ  
花が咲きたいなさいふた所罰の深  
い此身の上せめて未來をイヤサアノ  
女房共手を引てたもいざ〜さいふ  
に嬉しく女房が身拵さへそ〜くに  
いたわり渡す細杖の細き心もほそか  
らぬ誓ひはふかき壺坂の御寺をさし





りやマアごふせう悲しやま狂氣の如く身をもだへ飛をりんにもつげさなく呼べご叫べご其からもこたふるものは山彦の銜より外なかりける。エいこちの人聞へませぬくくはいな此年月の艱難もいさはぬ私か辛抱はな只一ト筋に観音様へ願込めて、どうぞ早ふ眼の明きます様お助けなされて下されま祈らぬ間逆もないものをけふに限つてこのしだら後に残つて私しやまあごふなるぞいなアごふせふぞいなくくくア是を思へば最前に誦はしやんしたアノ歌はごふやら心にかゝつたも今で思へば其時に死る覺悟で有たのかエしらなんだくくわいな斯言ふ事なら何のマアお前を無理に連れて來ませふ堪忍して下さんせくくほん

に思へば此身程はりないものか有かいな二世を契りし我夫に長いわかれこなる事は神ならぬ身の淺ましやかる憂目は前の世の報ひか罪かエい情なや此世も見へぬ盲目のやみより闇の死出のたび誰が手引を仕てくれふ迷はしやるのを見る様でいさしいわいのさかきくごきくごき立く歎く涙は壺坂の谷間の水や増るらん。漸々涙の顔を上げマ、悔むまい歎くまい皆何事も前の世の定り事と諦めて夫と俱に死出の旅々思へばかたみこの杖を渡すは此世を去てゆく行先導き賜へや南無阿彌陀佛みだ佛の聲諸共に谷間へ落てはかなき身の最期貞女の程こそ哀れなり。頃は二月中ぞらや早や明け近き雲間よりさつこ輝く光明に速て聞ゆる音楽の音も妙

なる其中にいさもけ高き上臈の姿を假に觀世音微妙の御聲うるはしくいかに澤市承はれ汝前生の業により盲目こなつたりしかも兩人なむら今日にせまる命なれ共妻の真心又は日頃念ずる功德にて壽命を延し與ふべし此上はいよく信心満仰して三十三所を順禮なし佛恩報謝なし奉れコリヤお里く澤市くご宣ふ御聲諸共にかき消す如く失賜へば早や晨朝の鐘の聲四方にひびきて明け行く空ほのくくらき谷間には尊も分かぬ二人こもむつくこ起てヤアこなたは澤市様アコレこちの人お前の眼が明いて有がなエアノほんにコリヤ眼が明いて有るチ、眼が明たくくく眼が明たチエ観音様のおかげ有難ふござります

くくくくわいのふム、そしてアノお前はマアごなたじやへごなたごは何ぞいのコレ私はお前の女房じやはいなエ、アノお前がわしの女房かへコレハシタリ始めてお目にかかりますア、嬉しや、夫に付てもふしぎな事まさしくわしは谷へ落ち死だと思ふて何にも知らぬ其内に観音様がお出なされ前生の事細々ご御しらせサイナア私もお前の後を追谷へ落たに違はないが身内に一つも疵付かず其上お前の眼は明ホコリヤマア夢ではないかいなム、そんなら今澤市、さおつしやつたがコリヤ観音様、直々にお呼び生け下さいましたに違ひはないハ、ハ、ア有がたや忝けなや、是より直ぐお禮参りは浮木の龜始めて拜む日の光りは年立かへ

る心地ぞや、是ぞ誠に観音の御利生有りけるや、見へぬ眼も見へ明らかに有がたかりける新玉の年立歸る如くにて氣も洩さぬ夫婦の命も助かりけるは誠に目出度うさふらひけるけうは嬉しや枕を納めて折しも朝の日の目を拜んでお禮申すや神や佛萬見せ賜ふは是偏に觀世音これ偏に觀世音の誓の重きは岩を建水をたへて壺坂の庭のいさごも淨土なるらん御しめし有難かりける御法なり。

涼味は扇とルールー  
**アサヒビール**  
 清涼飲料  
 朝日





中將姫雪責の段

切 鷗山古跡松

中將姫雪責の段

豊成公	岩根御前	大貳廣嗣	桐の谷	浮舟	中將姫	奴宅内	奴角内	胡弓野澤勝芳
竹本土佐太夫	竹本南部太夫	竹本長尾太夫	竹本源路太夫	竹本文太夫	竹本小春太夫	竹本千駒太夫	竹本播路太夫	野澤勝芳

この淨瑠璃は「當麻守縁起」に絡る中將姫の譚で、並木宗輔の作。初演は元文五年二月初日の豊竹座であります。横佩右大臣豊成卿の息女中將姫は性來伶俐な實さてそれを繼母の岩根御前が妬んで、御物の觀世音尊像を姫に預けて、姫の油斷に乘じ腹心の者に盜ませ紛失の罪を姫に嫁して雪中に姫を引き出し詮議します。姫の侍女桐の谷、浮舟が相援けて繼母一味の奸策の裏をかいて姫を救ひ出し雲雀山へ落すさいふのこの段の内容であります。

この中將姫の比較的事實に近い説

として傳へられてゐるところに依ります。中將姫の父右大臣藤原豊成卿は温厚の人物でありました。弟の仲鷹は内大臣として權威を揮ひ秘政が續出したので左大臣奈良鷹が其專横を憤り、却て仲鷹の爲に滅せられました。この事件の餘沫を受けて中將姫の兄乙繩は誣られ、豊成卿は大宰員外帥として九州へ左遷されました。姫は父や兄の冤罪に連なつたのを哀しみ世を果敢んで遂に大和國當麻寺に入り尼となつて終つたこと記されてゐます。

(床本) 雪責の段 (切)

程なく入來る大貳廣嗣、王子御臺の人喰馬、上座にむつこ押し直り、是は、岩根御前この間は御參内なき

人形

右大臣 豊成公 吉田玉次郎  
 岩根御前 桐竹政 龜  
 中將 姫 吉田扇太郎  
 大貳 廣嗣 吉田玉 幸  
 桐の谷 桐竹紋太郎  
 浮舟 吉田市 松  
 奴角内 吉田覺三郎  
 奴宅内 吉田兵次

故、お上にも殊の外お待ち兼ね、扱彼の観音の儀につき其元の願によつて日ごころにかわらぬ催促、が姫は何ぞ致したご間に御臺は小聲になり、サア其観音のごことは兼てわし盗み取らして置いて、王子様ご言合せ日毎の催促、其落度を以て中將姫を亡物にせん、ムイヤサ亡き物にせんご思へ共、若しや盗み取らした事をアノ若黨の林平めが白状したかご、姫をせこめて問へごも云はず、最前連合豊成が詞の端では、ごうやらかえづいた様で氣味が悪い、云はさぬ仕様は有さごも、其仕様こそ様々あり、いつその事の中將姫を殺して仕舞へばア、イヤ、殺しては夫豊成もサ、只は置まい、サ、サ、其殺しやうこそ、様々有アレアノ大雪こそ

幸、割竹の罪に合せ、身内に疵付け雪中に捨て置けば寒邪入つて死るは定、さもなくては性根亂れ、誠の事は得云まじ、ソレの中將姫を引出し召され、チ、ホイ、チ、ホイ、召され、い仕様ヤア、家來共、早く參れ、ご呼出し汝等てん手に割竹持て姫を是へ引立て來れ、サ行行、エ、行ぬか、ア、コリヤ、用捨ばならぬぞ、用捨致さば汝等も首が飛ぞよ、サ合點かご云付られて是非なくもはつご答へて引出す、餘所の見る目もあらいたわしの中將姫、七日七夜は泣明し、明くる八日の朝の雪、我を貴苦の種さなり、身も冷わかえる其上に、素足に雪の氷道、劔を踏むが如くにて淀めば行けご打擲、梢の雪が一積り脊に打かればごふご伏

し、起れば擲く割竹に、手足もしびれ身もちいみ、命も息も絶えくにて、赦させ給へ母様ご、聲も惜まず泣き給ふ、廣次遙かに見下ろして、ヤア中将姫、親世音の尊像は何處へやりしぞ眞直に白状せよ偽るご其上に、骨をひしいで言はさにや置かぬサごうじやくご尖き詮議に姫は顔を上げ、愚の仰候ぞや、自何をや包むべき、勿体ない父上の、咎めに逢はせ給ふ事何處へ、隠し置くべきぞ、遠からぬ中尋れ出し、お戻し申さん夫迄の責苦を赦し給へやご、涙ご俱に宣へばハテ手延なる言ひ譚、尋れ出す覺あらば、在所知つたに極つたり、アレ家來共、上着を引剥ぎ降り積む雪に埋らせ、打すてて白状させよ、畏つて侍共、情なくも

上着を剥ぎ取り、てん手に割竹ふり廻し、擲きたつれば姫君は、ヤレく心なの下部やな昨日迄も今朝迄も、痛はりかしづく身なりしに、淺間しや今日又、我を責るか悲しやご、大地にごふご打伏して絶入消入る御有様、餘所の見る目も哀れなり次第に雪は降りつもり、打つ割竹で身内は切れ、肩脊に積る雪水が、五體に流れ浸み渡り五臟六腑が一時に凍えるつらさは斷末覺、かしこに倒れ此處に伏し、赦してて一人々のふ死る末期に一遍の御經讀誦はさして呉れ是が此世の願ひぞや、是なうくご手を合せ、かこち給へば心なき、下部も割竹投捨て、袂を絞るばかりなり、雪もおだ止む折からに追拂はれし桐の谷が、逸參に駈け戻り

入らんごすれば枝折戸締めたり、打破るも安けれご狼藉者ご言はれてはお助け申す妨ご小柴より延上り申しくお姫様、いつ迄科を身にかぶり責苦には逢ひ給ふぞ失せたる筋の段々をなぞく言ひ聞きをなされぬぞ、但しは私申さふか、道立も餘りごあせり歎けば中将姫ヤレ未練な事を言ふ人や、最前状でも言ふ通り、如何なる責に逢ふ共、言はぬむわしえの忠義ぞご、呉々書いたを見やらぬか、そなたの詞を聞き入れて、つれない命ながらねるも、今一度父上のお顔が拜みたい、計りぢやわい喃、もしやこの場で責殺されかばれば雪に埋む共、天より受けた罪ご思へば、誰を恨みる事もない、言やる氣ならば今死る、必ずいふて

たもんなやア、コレ〜申しお前を助けふ  
 計に言ふことこそ申せ、お果なさるさある  
 を何の〜〜申しませふぞいな〜嘸お  
 寒ふも有るうし、身内むちぎれる様にござ  
 りませふ、ム、アノ言ひやる事はいの西風  
 の吹く時は、彌陀の御國の御迎ひこ、思へ  
 ば呵責もつらからず我も苦みを見遣ふなら  
 嘸言ひたかるう、〜〜ぞそなたも堪忍  
 して。早ふ爰を逝でたもこ、宣へば桐の谷  
 はせき上げ〜正体なく、戴につれて降る  
 雪に、エ、時も時このマア雪の降る事は  
 いの、何をなご身をあせり、笠の替りこ  
 脱ぐ上着、申し〜お姫様、恐れ乍ら雪防  
 ぎは、コレこの一重召させ給へこ、上着を  
 ば切戸の内へ投入るれば、ア、これ〜自

らば科ある身迎この責苦、そなたはやつげ  
 りこの一重を、エ、イエ〜申し私は最前  
 から、モウ〜腹が立〜身内が燃えて  
 暖ふござります。やつぱり夫を、おめし  
 なされて下さりませ〜なアム、やさしい  
 そなたの心やな、死でも忘れぬ忝いこ。  
 しやくり上げ〜押し戴かせ給ふにぞ、桐  
 の谷は聲を上げ右大臣家の姫君さまいやし  
 いわらばか一重をば戴き給ふ心根も有難い  
 やら悲しいやら、雲井に近き御身にもかゝ  
 る例も有る事かこ、狂氣の如く取亂し前後  
 正体泣叫ぶは理せめて哀れなり、方人あ  
 る程逆立つ炎、熊さ口には岩根御前しづ  
 く庭に下り立つてこりや家來共其方達か  
 責め様は餘りむごふて見て居られぬ、打様

化粧タイル

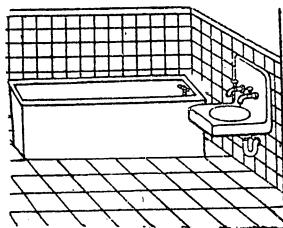
水道衛生工事

洗面、浴場、

水洗便所設計

汚水浄化装置

特許無臭便所



西區立賣堀北通一丁目  
新一橋

岡部 商會

電話新町一六六九  
二七六

阪急 夙川

岡部商會支店

電話西宮一九七六

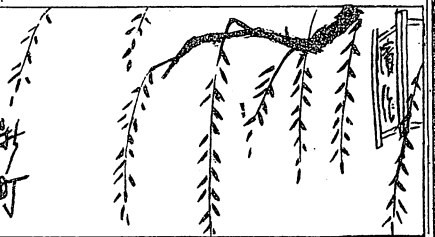
知らずば教えてやる。コリヤよふ見て置こ  
 割竹押つ取り立よれば、ノウ情なや母上さ  
 ま、打たる、杖は厭はれど、母様のお手づか  
 ら打ち給へば、世の人の思ふ手前も情ない  
 やつぱり外の手に掛けて、存分にして御心  
 を、お休なされて下さりませ〜チ、やさ  
 しい事をいふ子やの、常不便なる此母が、  
 どの様に責た逆、世上の聞え悪ふはあるま  
 い、むごふは打ぬサ受て見よ、さぐつこ引  
 寄せ、たぶさ髪取つてれちつけコレ娘や、  
 むごい仕方ミ嘸恨ます、必ず悪ふ思やるな  
 なさぬ仲の子成共、我子にすればマ可愛い  
 物、又可愛うのうてよいものか、包み隠  
 すをこの様に、白状するまで詮議する自  
 が心のせつなさ、涙もこぼれて悲しうて、

器一ぱいにせまれ共御上意なればサ、せひ  
 がない、サア言や、ハアイごふぢやハアイ  
 ごふじやハアイ、エーしぶさい子やのふ、  
 言はずば斯して云はするこ、情なくも引つ  
 かみ引き廻すを見るよりも、たまりかたて  
 桐の谷は、枝折戸蹴破り駈け入つて、岩根  
 御前が手をもぎばなし、割竹押取りふり上  
 る、コリヤ〜桐の谷主に向ひ慮外なやつ  
 エーそれでも餘り、コリヤヤイ忝くも當  
 今ぞ仰ぐ、春日の君を育て上たる此の岩根  
 そちや見事打つか、サアぶてサア打てサア  
 打たぬかやい、サアごふじや、エーエーお  
 前は〜〜様はのふ、何ぢや無念な口  
 惜しいか〜エーアノマア受惜そふな顔は  
 いのふムーハ〜ムーハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜

即席御料理  
 電話新町九番

濱田

新町



リヤ〜家様共、妨げするを見て居るか、  
 アノ女めを打て〜打すえよと、言へども  
 下部は尻込し餘り〜逃げ行く、廣嗣見  
 るより聲あらへげ、ヤア〜誰かある、ア  
 ノ女引摺りだせと、罵れば、畏づて駈来る  
 浮船、桐の谷をさつて突のけ、そもじも姫  
 君の肩を持ってばこちも亦みだいな様の肩を持  
 つ最前の意趣返し、かうしてするさ打かゝ  
 る丁ご請留め引げし、はつしと打ば打落  
 し、掴みかゝるをめつた打是、のふ待てと  
 姫君の取付給ふも用捨無く、痛手さしらす  
 打つ竹が急所にや當りけん、うんご計りに  
 息絶えたり浮船は狂氣の如く、是々申し御  
 臺様廣嗣様、姫君の息が絶たごどうせうぞ  
 ご狼狽騒げば繼母、愕然廣嗣も豊成公へ知

れぬ内、拙者はお暇チ、夫々、自も宿には  
 居ぬふり、マ知らぬ振コリヤ浮船大事の姫  
 をよふせ〜殺したな夫へ知れた其時は、  
 必ず〜争ふな、さいひ罵りて兩人共、王  
 子の館へ去り行く。桐の谷起立ち、お主の  
 敵、浮船やらぬも駈け寄るをヤレもふよい  
 く、夫には及ばぬそもじとわしとが仲悪  
 ふして見せたので、うま〜こ一ばい参つ  
 た、猫股婆、サア〜申しお姫様、これか  
 らお命延ばる目出たき門出、氣をばつた  
 りと持ち給へと、拖き起せば、姫君は、教  
 への通り死だふり、が跡で知れても大事な  
 いかや、ハテお氣の弱い事ばかり、人の  
 來ぬ内コン申し雲雀山迄いざ〜と、すい  
 め申せば姫君は二人が肩を力草、縋りて漸

・用愛家曲聲・

げやみお答贈

めあ音美

入罐きし美

¥ 1.00×0.50×0.30.

お菓  
 かき  
 子  
 昆のあ  
 井戸栗おこし  
 名東(菊池家)  
 富貴寄

文樂座前・  
 電南六六九〇  
 文樂堂

立ち上り、出させ給ふ後より、ヤレ待て暫しと父の御聲ハツミ二人は立おほひ、隠す間もなく豊成公、打萎れ出て給ひ、姫は最期さげたるこや、せめて死骸に一言の云わけしたさにさめしぞよ、繼母岩根がつけなきも、今日の責苦は知つては居れ共、今彼れも邪見を顯げさば譏を構はて先君を流罪さするは必定そこを思ふて是非なくも一人の娘を餌に飼ひ、殺さば殺せ死なば死れど餘所に見なする我心、コリヤ推量せよや二人の者、親ぢやもの、子ぢやもの、心の内の悲しさば、鉛の針で脊筋をば、たち切らるゝもかくやらん、君の爲親のため、ムいよ艱難をしてくれたなア、親は隠れて血の涙浮船、桐の谷、頼むぞよ、雲雀山へ

死骸を連れ行き、よきに葬り隠して呉れ、せめては野邊の見送りよ、涙と俱に立ち給へば、姫は悲しき物影より父の御恩の有難さ、ま一度お顔をさ出給ふと、二人がさめ押隔て隠せば遠む父君も延上り涙にむせぶ御聲にて自体芭蕉の葉の如し、必ず風に破られな、時人を待たざれば、何れか先立ち何れか残らん、逢ふが別れぞさらばくおさらばさらばと歎に沈む御姿、見るに悲しき彌増さり西方彌陀の御國にて待ち奉る、父上様も名残り惜げに出給ふ死を急いだる別れ路は娑婆即寂光爰冥途と勇める人も跡や先、何れ遁れず遁れても、後は消え行く雪道や、胸は氷さ鳴川の、御館を離れ雲雀山、茨の里へさ急ぎ行く。

お電話の御用は  
南  
5番・701番・711番  
(長)132番・5291番  
西630番



御宴會づま

明・いる感・のじのい

のまさなみ  
理料泉温一南

一南温泉料理

四ツ橋

四ツ橋畔

よ

八月の文樂座  
り  
消息 日誌

△八月一日

八月一日初日開場。

△八月二日

大阪府市教育會主催の夏期講習會々員の  
方々が本日より九日迄に涉りマチネーに  
よつて紹介されたる古典藝術を實地見學  
に御來座あり、當座はこれ等會員のため  
に特に優待法を講じ御厚情にお應へいた  
しました。

△八月三日

梨園の大御所成駒屋鷹次郎丈が一門を引  
連れ來座あり、新人小春太夫の十種香を  
きかれ、治兵衛から小春さんへこ洒流た

△八月十四日

贈物をする等何處までも天下の治兵衛役  
者としての名優氣質はこよない欣ばしい  
ことであります。

吉例文樂會開催。

△八月十九日

八月興行も大方みなさまの厚き御後援に  
よつて盛況を呈し打上げました終演まで  
賑はつたことを況く御ひぬきの方々へお  
禮申上げます。

△八月二十日

秩父宮殿下、同妃殿下の臺覽の光榮に浴  
しました。

・場所・大阪城組州御殿に於て

古靱太夫清六にて「尼ヶ崎の段」人形  
は文五郎のみさほ。榮三の光秀。玉松  
の重次郎。紋十郎の初菊。

茶



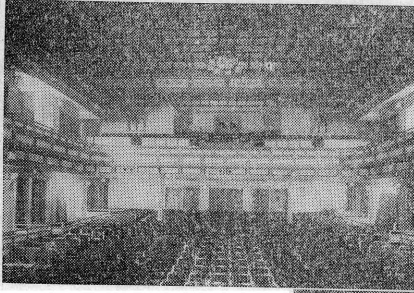
大坂及池橋

五建

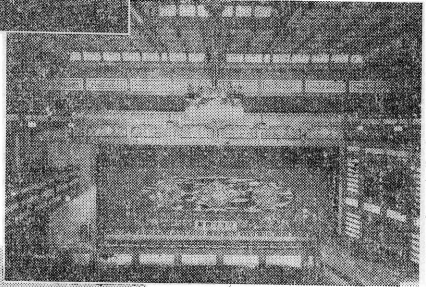
電話新町二六三番



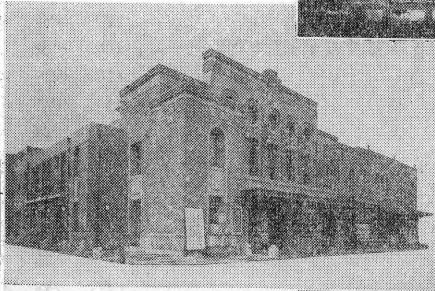
四ツ橋  
文樂座  
グアラフ



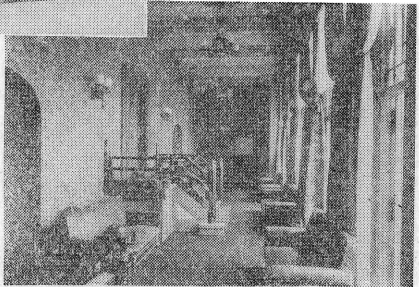
内場観覧席全景



観覧席より舞臺を望む



文樂座外観全景



二階正面休憩所と特別御座入口

## 文樂座使用料 (一日)

時間 場所	收容人員	晝(自正午 至午後五時)		夜(自午後六時 至同十一時)	晝(自正午 至午後十時)	
		平日	土曜	日曜 祭	晝	夜
文樂座	約 850人	平日	80圓	100圓	160圓	
		土曜	80圓	110圓	170圓	
		日曜 祭	90圓	110圓	180圓	

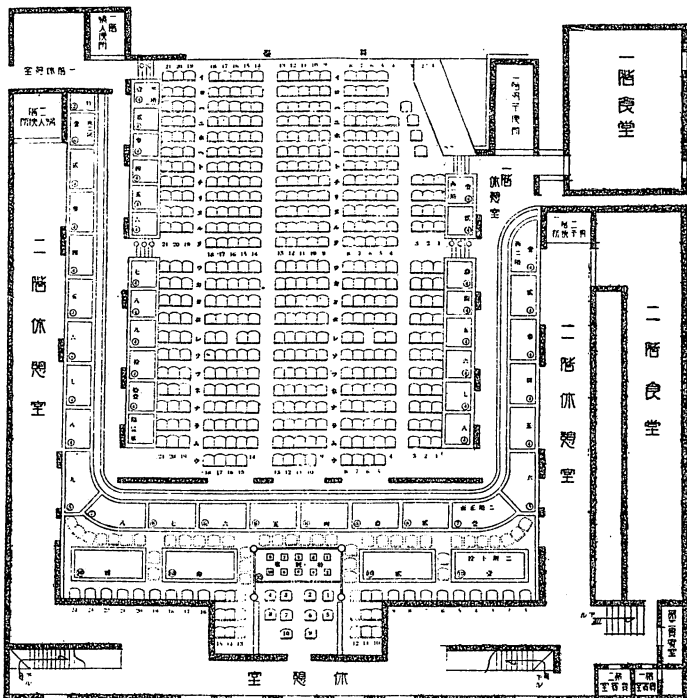
◆上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◆割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

## 器具御使用料

器 具 備 考	數量	料金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回 15圓
同	同 普通燈ノミナラザルトキ	1回 20圓
所作舞臺	晝 夜	1回 10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回 50圓
同	晝夜通シ	1回 70圓
アプライトピアノ	晝 夜	1回 20圓
音樂譜面臺	晝 夜	1臺 10錢
アークスポット	晝夜4・5 KW	1臺 10圓
スポット	同 大(1000W) 小(500W)	1臺 5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺 5圓
シーリングスポット	100W 500W	1臺 3圓
サスペンションライト	100W 500W	1臺 2圓
フットライト	20W 100W 7球	1本 1圓
セラチンペーパー		1枚1回 1圓
大衝立	晝 夜	1對 5圓
演壇設備	同	1回 2圓
其他	必要ニ應ジ實費	
受付2名、案内10名、 電話係2名、下足2名	1日1人 1圓宛	16圓
冷風裝置使用料		無料
暖風ラゲエータ使用料		無料

# 文樂座御場席案内



御観覧料の外一切御不要の上  
 大部分椅子席になつて居りま  
 すからお一人でも御愉快に洋  
 服でもお樂に御見物が出来、  
 またお出入が御自由です。

前賣切符壹等お座席・壹等椅  
 子席のお切符は五日前から發  
 賣致します、また五日以後の  
 お切符も壹等席に限り御豫約  
 申し上げますから上圖の座席  
 表に依つてお早く御望みの御  
 座席をお申し込みになればお  
 心のまゝにお好きな處が御自  
 由にされます御用命の節お呼  
 出しの電話は

南四七一一番で御座ゐます  
 切符賣場右指定席切符は當日  
 前賣とも正面西側本家入口に  
 て發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正  
 面入口にて發賣致します。

尚多人數様お團體様のお申込  
 も御相談いたします。

# 文樂座食堂御案内



洋食堂  
(西館階上)

ス ピ ー ド ・ テ イ ナ ー ー (御定食)	ス ラ イ (海老、魚)	コ ロ ツ ケ ー	ビ ー フ カ ツ レ ッ	チ キ ン カ ツ レ ッ	ビ ー フ ス テ ー キ (五分間)	カ レ ー ラ イ ス	チ キ ン ラ イ ス	コ ー ル ド チ キ ン	コ ー ル ド ハ ム	マ カ ロ ニ ー チ ー ス	ア ス パ ラ ガ ス	サ ン ド ウ イ ッ チ	ソ ー ダ 水 (特製)	文 楽 ス ペ ッ シ ア ル ビ ー フ ス テ ー キ
時 四 〇	四 〇	四 〇	四 〇	四 〇	四 〇	四 〇	四 〇	四 〇	四 〇	四 〇	四 〇	四 〇	二 〇	〇
一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、

和食堂  
(西館階下)



吸 付 辨 當 御 食 事 (五品御飯香物)	親 食 事 (五品御飯香物)	に ら ぎ 子 司 井	ち り 子 司 井	雀 ら ぎ 子 司 井	雀 ら ぎ 子 司 井	雀 ら ぎ 子 司 井	雀 ら ぎ 子 司 井	雀 ら ぎ 子 司 井	雀 ら ぎ 子 司 井	雀 ら ぎ 子 司 井	雀 ら ぎ 子 司 井	雀 ら ぎ 子 司 井	雀 ら ぎ 子 司 井	雀 ら ぎ 子 司 井
二、	二、	二、	二、	二、	二、	二、	二、	二、	二、	二、	二、	二、	二、	二、
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

酒場  
(西館階上)



洋酒  
お茶

文 楽 カ ク テ ル	マ ン ハ ツ タ ン カ ク テ ル	ド ラ イ マ テ ニ イ	ア ブ サ ン フ ラ ツ ペ	ミ リ オ ン ダ ラ ー	ウ イ リ オ ネ ア	ウ イ リ オ ネ ア	ウ イ リ オ ネ ア	ウ イ リ オ ネ ア	ウ イ リ オ ネ ア	ウ イ リ オ ネ ア	ウ イ リ オ ネ ア	ウ イ リ オ ネ ア	ウ イ リ オ ネ ア	ウ イ リ オ ネ ア
七 〇	六 〇	六 〇	六 〇	九 〇	七 〇	七 〇	七 〇	七 〇	七 〇	七 〇	七 〇	七 〇	七 〇	七 〇
一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、

南一温泉料理  
經營

## 文樂座

### 使用規定

- 一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ
- 二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守リ下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ問ハズ御使用前テモ御使用中テモ御使用ヲ取消シ致シマス
- 三、當座御使用料金ハ別表ノ通りデアリマス長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス
- 四、御使用料金ハ當座ガ御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセマ
- 但シ不可抗力ニヨリ當座ガ御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス
- 御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出テラレシ時ハ半額御返却申シマス
- 五、御使用方法ニヨリ當座が必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用テ必ず其ノ設備ヲシテ戴キマス之ノ設備ヲ怠ラレシ時ハ御使用ヲ取消シマス
- 六、御使用者ノ御希望テ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用テ特別ノ設備モ出來マス
- 七、五、六項共ニ御使用濟ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ費用ハ御使用者カラ申受ケマス
- 八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ滅失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス
- 九、御使用者ハ當座従業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセン
- 十、當座従業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス
- 既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任セマセマ
- 十一、臺本板閣並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

五、御使用方法ニヨリ當座が必要ト認メシ時ハ御使用

## ◇文樂座御ひるき名簿募集◇

- 一、申込は必ず官製はがきの事。
- 一、葉書には両面ともに御住所御芳名を御明記下さい  
(御住所御芳名の他一切不要)
- 一、御ひるき名簿作製の上御芳名に随つて種々の計劃の御通報を申上げ、且つ御優待方法を講じます。
- 一、會費其他一切申受けません。
- 一、宛名は大阪市南區四ツ橋 文樂座編輯部宛の事。

フランス語に譯された

### 『文樂人形芝居の研究』 一部特價

宮嶋綱男氏著 寫真版數十個挿入 金一圓八十錢

人形御座と文樂座發達の歴史が全部判る唯一の文獻

### 『文樂今昔譚』 一部特價 金二圓

木谷蓬吟氏著

美しいグラフと興味溢るゝ好讀物月刊雜誌の

### 『道頓堀』 一部 金三十錢

## 御休憩は

露臺<sup>バルコニー</sup>遊歩場を御利用下さい。

食堂二階より御自由にお昇り下さいまし。

蒸しタオルの設備が御座ぬます

一階西側の大休憩所に御座います  
どなた様でも御自由におつかい下さい。高雅な香りの**資生堂ローション**を使用してぬます。

冷し麥茶を御自由にお召上り下さい

お土産に

お知合への通信用に

## 文樂木版手摺繪葉書

春陽會に於て文樂繪に就て定評ある

齋藤清二郎氏の作品です

毎月發行 三枚一組美麗なる包裝

一部 金五十錢

額面用のものも 三部一組別包裝

毎月發行 一部 金壹圓

**お食事は**

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

**賣店は**

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雑誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

**お化粧とお手洗**

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。(クラブ化粧室。)

**お煙草は**

一階二階廊下に喫煙臺を備へてあります。からお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

**御携帯品は**

正面一階に御預り所が御座います。お持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備があります。お帰りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが、不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

**お出口は**

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

**貴重品は**

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帯願ひます。

**お場席券は**

各自に御持ち下さい。切符に一枚づつ番號が附いて居ります。お場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします。

**案内人へ**

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

**幕間中は**

案内人がお茶を差し上げます。から御休憩所でお自由にお飲み下さい。

**場内にて**

寫眞撮影は絶對にお断りいたします。

**出演者**

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めます。から、豫め御諒承願ひます。

**當座御使用の**

場合は事務室へお申込下さい。『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種備物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。一階西側に給茶處と大休憩所を新設しました。から御使用下さい。

**御休憩の間は**

**四ツ橋**

**文樂座**

前賣切符専用電話南四七二番  
電話南 三七八八番

昭和六年 八月三十日印刷  
昭和六年 九月一日發行

大阪・四ツ橋・文樂座  
編輯兼 大塚 頁三  
發行人

大阪市西區土佐堀通一丁目  
印刷者 永井太三郎

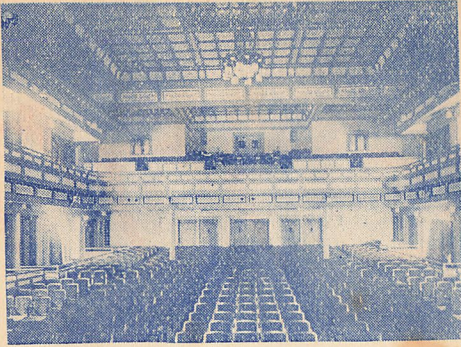
大阪市西區土佐堀通一丁目  
印刷所 永井日英堂印刷所

爽涼の秋を飾る  
御經濟的な

大阪の宴會劇場

「文樂座の御宴會」を

御利用下さい。



金 四 圓 也 (御一人様)

御座席は……一等指定椅子席  
お食事は……皆様本位の定食  
お寫眞は……お揃ひの記念撮影  
番 附……床本と總配役付

お申込は 二十人様以上を承べります。

お寫眞は 終演と同時に持歸り出来る様速成  
いたします。

お申込は お場席其他の準備の都合上五日前に  
願ひ致します。

お申込は 文樂座事務室へ願ひ致します。

お電話は 南四七一一・三七八八・七四〇八番



粉白利便

# ンビブラク

肌白  
色色

珠の顔なめらかに  
すべり伸びゆくころよさ  
の伸び輝く生地の榮  
クラブビシンの薄化粧



ムーリク身ブラク